三田の理財科を出て某銀行に勤務する様になつてから今日までの約二年間の一身上の驚くべき變轉が、嬉しき色に包まれつゝ轉々と、様々の象を頭の中へ浮び出す。浮び出ては去り、去つては浮び出て來る。

主人は口邊に笑を漂はしつゝ炬燵の上の電球の影を見詰めて居たが、急に半身を起して枕元の夕刊の下になつて居た敷島の箱を握み、立つて長火鉢の前へ坐つた。莨に火を附けて時計を見た。十時半を經過してる。スーと襟から入る寒氣に首を縮めながら、馬鹿に遲いなと呟やいた。

八時半頃に細君は小女を連れて買物に出たのである。大通りの露店を見て歩いた。始めて迎ふる新年には何かと調はぬ勝ちであるし、彼れも欲しゝ是れも欲しゝと思ふものが多い。買物に就ては大概は主人とも相談して來たのであるが、猶ほ一應談合した上で是非とも調へて見たいと思ふものもあつた。此の様な事なら主人と共に來れば良かつたとも思つたりした。大通りの兩側に並んだ露店は長く

〳〵續いた。人通りも繁く店々も年に一度の書入に店員を増し、電氣に、瓦斯に燭光を増して、客呼ぶ聲に賑いで居た。細君は往きに右側を露店の盡きるまで ゆき、歸りに左側を戻つて來た。かくて時間も意外に要したので有つた。脊には十月に生れた嬰兒が良く眠つて居た。

來る年で漸く二十才を越さうと云ふ若き細君も、大晦日を控えた世間の混亂の中にありては、恥かし氣もなく買ひ集めた品々を包んだ大きな風呂敷を抱えて、世間と同じ様に忙がはし氣な氣分に包まれつゝ歩いて居た。

大通りを離れて暗き歸路に附いたときに始めて夜が更けて寒氣も大方ならぬに氣付いたのである。買物の幾分を持たした小女は寒さうに細君の影に添うて居た家へ歸つたのは拾一時頃で有つたらう。

待ち詫びて又も炬燵へ潜り込んで居た主人も、如何にも嬉し氣に寒さも忘れて買物の品々を一々説明付けて擴げて居る細君の顏を見ては、遲かつた小言も遂に

言ひ出し兼ぬて終つた。細君が一心に喋つて居る買物の事には餘り熱心に耳を傾けて居なかつた主人は、細君の言葉の切れるのを待つて、脊の兒を下してやれよと忌々し氣に云つた。

細君は買物に就て主人より爾後承諾を受くべく色々の問題を持つて居たのであつたから、脊の兒は自然と後廻しにされて居たのだ。眠つて居ることゝのみ思つて居た兒は、帽子の影から大きな眼を開いた居た。主人に頰を突かれて笑顔などを見せた。然し頰や鼻の頭は寒氣に吹かれて赤く、然も氷の様に冷えて居た。細君の乳房に附いて間もなく眠に就いた。

眠れる兒を床に移して後、更に買物に就て、既に買入れしもの未だ不足せるもの、欲しかりし品々など細君の主人へ對する談合は容易に盡きなかつた。漸く床に就いたときは既に十二時を經過して居た。その時嬰兒は安靜に眠つて居たと云ふ。

細君の疲れたる身體は五時頃まで寢返りもせずに、深い眠を耽ぼつたのであつた。五時頃にフト眠から覺めたとき嬰兒の様子が常とは變つて居る。顏の色も常ならず、呼吸も今にも絶えさうである。四肢に力を入れ眼はあらぬ方を見詰めて口を引締めて居た。

呼び起された主人も大に驚きて濡れ手拭で顏を拭いてやつたりして見るが愈々苦し氣である。慌てゝ醫者を迎えて來た。醫者は早速注射をするやら芥子を張るやら色々手當をして呉れたが、既に遲かつたか、七時頃に息の根が止つて終つた。幾回もの注射も効なくて遂に醫師より死せりと申渡されたとは、若き夫婦は夢ではないかと涙も出ず顏を見合せて居た。

何うしても駄目なのですかと主人は更に醫者に念を押して見た。何うしても駄目ですと反響の様な返事を醫者から聞いても主人は未だ何うしてもと云ふ意味が分らぬ様な顏をして居た。

醫師より渡された死亡診斷書には毛細氣管支炎と云ふ病名が附せられてあつた。

買物に嬰兒を負ふて歩いたと云ふ事が恐るべき此の結果を招來せしめたのであつた。正月の新家庭を飾るべき多くの買物は不用に歸して終つた。

餘りの事にその當坐は涙も出なかつた夫婦も、日を經るまゝに手に觸れ眼に付く愛兒の形見の品に誘はれて眼に涙を漂えてる機會が多くなつた。

一年未滿位の乳兒に長時間寒風を吸はせたり致しますと、細き氣管支までが一時に炎症を起して、時にかゝる猛烈なる病症を惹起せしむることがあるものです。殊には百日未滿の乳兒などを夜更けに長時間外へ連れ出すと云ふが如きことは、嚴に戒しめねばなりません。

溫室法と保溫法

一　室を溫むることの必要な病氣

呼吸器に疾患のある兒に對しては是非ともその兒を寢かせて置くなり、若しくは遊ばせて置く部屋は一定の度以上の暖さにしておく必要のあるものです。一定の溫度にして於いて且つ相當の濕り氣を持たしておきますと、呼吸器疾患をその程度にて阻止せしめ、增惡せしむることが少いものです。假令ば鼻加答兒を起してゐる兒ならば鼻加答兒を更に氣管支炎までにせずに止め、氣管支炎の兒ならば氣管支炎にて病氣を治癒せしめ、更に肺炎にまで進ましむる恐れがないと云ふものです。既に肺炎の兒などを寢せて置くにも是非とも必要な事は申す迄もなき事です。此の外或る疾患に於て呼吸器病を併發する恐れのある場合の如き、假令ば麻疹や百日咳に罹つて居る兒などに對しての如き、醫師が暖かき部屋に寢せて置きなさいと注意す

る病氣に對しては是非とも部屋の溫度を一定度にする必要があるのです。

二　種々なる溫室法

坐敷を暖むるには色々の方法手段があります。東南に開いた部屋にて硝子戸を廊下の外椽に置いた部屋があれば理想的です。かゝる部屋であれば充分に日の當る日中なぞは、部屋の溫度を華氏の六十度乃至七十度に保つ事は容易です。六十度乃至七十度に保たれておれば外に人工的の溫室法を施す必要がない位なものです。されどかゝる部屋とても朝夕はかゝる譯には參りません。是非とも人工的の溫室法が必要です。

人工的の溫室法では如何なる種類があるかと申しますに、昔は火鉢とか爐とか一二の種類より無かつたものですが、近來は色々な種類のものが出來ました。石炭ストーブ、瓦斯ストーブ、電氣ストーブ、石油ストーブ、コークス暖爐等、その型に

於て、燃料に於て、多くの新案が發表せられて、吾れ等の意想外に種類の多いものです。吾れ等は何れを採擇いたすべきでありませうか。

三　燃燒生產物の室內に發散せらるゝものは不可

その燃料が何でありませうとも、その燃燒に因りて起る生產物がその儘室內へ發散いたしますものは、何れも良しくないものだと思はねばなりません。一般に我が國の建築は建付が粗漏で隙間だらけですから、室內の空氣の交代が强いものです。これが西洋間の如き密閉の充分出來る部屋なぞで有つたならば、一時間も經たならば昏倒して終ふであらうと思ふ樣な亂暴なる溫室法が平氣で行はれて居ります事なぞがありますが、假令室內空氣の交換が早いと申しても、害のあるものは依然害があるものですから出來る丈け注意せねばなりません。

されば煙突のなきストーブの類なぞは、いづれも良ろしくありません。此の點に

於いて近來漸やく盛んに用ゐられんとする瓦斯ストーブのごときものも煙突を用ゆれば兎も角、煙突を用ゐずして燃燒產物を總て室內空氣に混入せしむるが如きは非常に有害であると思はねばなりません。裝飾としても經濟上よりも簡便な點よりしても至極上等のものですが、御使用に際しては是非とも煙突を用ゐねばなりません殊に密閉せられたる西洋室などには煙突なしに用ゐらるゝときは意外の災害を招致する事のあるものです。此の外石油ストーブとか、コークス暖爐とか申して全然煙突の裝置なきものなどが出來ておりますが、是れ等もその弊害の甚だしき點に於ては瓦斯ストーブ以上です。殊に不良なる石油や充分乾溜せられざるコークスの類を用ゐますと、自然にその生產物にも雜多なる有害瓦斯が發生いたしますゆゑに災害も一通りではありません。かのコークス暖爐が用ゐてあります部屋へ入りますときプンと鼻粘膜を刺戟して不快なる臭氣を感じますのは、不良なるコークスに附着してる硫黃の類が燃燒して亞硫酸瓦斯を發散するためなのです。かゝる有害瓦斯を含

む室內に氣管の惡しき小兒を入れて置きますと病症を益々不良ならしむる許りです。

然らば生產物のなきものは何であるかと申しますと、スチームの鐵管を室內へ通すか、若しくは電氣ストーブを用ゆるのですが、これは經費の點やら建築の都合やらで一般に御進めいたす事は出來ません。之れ等が溫室法としては理想的なものであると云ふ事は覺えて居ても不用ではありますまい。

何と申しても我が國で一番普通に用ゐられておりますものは火鉢です。火鉢の事に就て少し御談しを申しませう。

四　火鉢の利害

習慣上吾人の室內に於て尤も普通に溫室の役を勤むるものは炭火を埋めた火鉢です。簡單で宜しいし又相當に溫度を出す事も出來るものです。

然しその害としては第一にその生産物が總て室内空氣中へ混入して終ふ事と、常に炭の補充をして居らねばならぬ事とです。されば生産物の發散したるものを都合よく室外へ導いてゆく方法が講ぜられたならば極めて都合よき事です。これは如何にせば佳なりやと云ふに、これは習慣上極めて面倒な樣に感じますが、一寸した事で之れを避ける事が出來るのですから、小兒の呼吸器病の病室などには是非とも實行して御覽なさい。

ボール紙でもブリキでも宜しいのです。笠に煙突の付いた樣なものを火鉢より二三尺離した處に釣つて置き、煙突を障子の紙を通して外へ出して置くのです。かくの如くすれば、可成に多量の炭を燃燒いたさせましても、その生産物や塵埃を起して室内の空氣を害ふ事はありません。

かゝる煩雜な事を避けて火鉢を用ゐたいとならば、その生産物を最も少くするために炭火を外の室で充分に眞赤にした上で病室の火鉢へ持込む樣になさい。かく赤

く燃えたる炭は比較的に有害瓦斯が一番少いのです。故に後から續足す炭も可成室外で一度おこしたのを持てこねばなりません。その室に居ながらに續いで居る樣では何にもならぬ事と知らねばなりません。

五　蒸氣を絶すな

火鉢なりストーブなりにて室内を暖めますと同時に水蒸氣を蒸發せしむる事を忘れては何にもなりません。空氣が溫るると同時に乾燥の度は增々加はるものです。同時に火鉢なり、ストーブの上なりに蓋を取つた湯沸しなり、金盥なりを置きて、不斷に水蒸氣を發散させておく必要があります。殊に呼吸器の惡しき人には尤も必要な事で、これを致さずに空氣を暖めてだけ居りますと、呼吸器粘膜を却て損傷して鼻血を出したり、加答兒を增進せしめたりいたすものです。

六　常に一定溫度たらしむべく心懸くべし

室を溫め始めたならば常に一定溫度たらしむる樣に心懸けねばなりません。かく心懸けて居ても常に溫度の變化を來し易いもので、殊に曉方の四時五時頃となりますと室外の溫度が低下すると同時に病室の看護の人々も疲れの出る時分で、火鉢の注意も自然に忘れられて著しく溫度の低下する場合が多いのです。何れは人工的に溫めて居ります事ゆゑ、嚴密に一定溫度に保つと云ふ事は至極困難な事に相違ありませんが、さればと申して餘ほどに急劇に變化せしむると云ふ事は、呼吸器に對して面白からぬ結果を招致するものですから、出來る丈け溫度の急變を防ぐ樣に注意し、殊に水蒸氣を今まで充分に發散せしめつゝありし部屋の溫度を急劇に低下せしめますと、その空氣中に浮游して居た水蒸氣は俄かに凝固して室內の器具や夜具を濕し、患者をして一層寒冷の感を與ふるのです。

此の部屋の溫度の急變は患者自身に損傷を與ふるものですから、部屋の掃除をする場合の如きも出來得べくば他に稍々同溫度の部屋を造りおきて、一度患者を此の部屋へ移し置き、病室が掃除され塵埃も靜まり溫度も上昇した頃に更にその部屋へ連れ込む樣にせねばなりません。

又病室の溫度に急劇なる變化を與へざる一法として病室の隣りに副病室を造り置き、此の部屋にも火鉢など置きて一定の溫度たらしめ病室を開閉するには必づ此の副室を經ていたす樣にいたしますと、病室の開閉の度毎に病室の空氣に寒暖空氣の渦を製造せしむる恐れもありませんゆゑ、これも重要なる一要件と覺えておかねばなりません。

かく申上げると非常に面倒しい事を申す樣ですが、之れ等は學理的にかくありたいと希ふ事共でありまして家屋の構造やなどがかゝる條件の成立を許さぬ場合も多いでせうが。かくありたきものだと云ふことさへ忘れねば病人の枕元を出入口の

方へ向けて、看護人の出入毎に北風の冷きつた風が患者の枕邊で渦を卷いて居ると云ふ樣な非常識が出來ずに濟むのですし、日中日當り良き時分に炭火をドシ〳〵起しておいて、夜も更けて氣溫の低下した頃に却て螢火一つない樣な事をして平然たる樣な看護の仕方をいたす事ともなるのです。

七　保溫法も同じ理

身體を溫めますのも同じ理です。炬燵、懷爐、湯タンポ等その種類は色々ありますが、何れにせよ生產物の發散するものは宜しくありません。炬燵にせよ、懷爐にせよ、何れも生產物が出來ますものは、假令その生產物の量は僅少でありましてもその出來ますものは夜具の襟元より拔けて外へ出ますものですから、病人はその大部分を吸收いたします。故に僅少でも障碍を與ふる事は大なるものであると思はねばなりません。此の點よりして保溫法に尤も適したものは生產物のなき電氣懷爐か

湯タンポが一等です。之れとても前の室內を暖めますと同じ理にてその溫度を急變せしむると云ふ事は良しくない事で、又餘りに溫め過ぎまして患者が常に發汗いたして居る樣では疲勞いたして良しくありません。

又保溫法に就て何より大事な事は火熱の存するものを身體へ接近せしめます事ゆゑ、火傷をいたさせる事です。殊に小供自身はそれに對して無頓着でありますため夜具の端を炬燵へ差入れて燃上つて居るのに平氣で寢て居たり、湯タンポで足の先を火腫れなどをして終夜泣いて居たのに、母親がそれとは氣付かずに居たりいたす事がありまして、意外の損傷を小兒に與ふる事があります、注意せねばなりません。

小兒の夜具の溫度は如何ほどにいたせば宜しきか、夜具の厚さは如何にと云ふ樣な事は大事な事ですが、一々寒暖計を挿入いたして於て何度何分と嚴重にいたす必要はありませんが、手を挿し入れて到る處程よき溫さであつたならば適當とせねばなりません。生れて間もなき小兒であると云ふときは充分に溫め

ねばならず、かゝるときは湯タンポを腰より以下の兩側に一本宛入れて四五時間毎に一本宛を取り出して湯を入れ換へると云ふ風にするのが宜しいです。

夜具の重さは餘りに厚く重くないのが宜しい。普通の小兒の布團を二枚重ねてその間へ毛布を一枚挿んで置くと云ふ方法が一番宜しい樣です。而して小兒の身體へは餘りに厚からぬ懷卷の樣なものを被ふておく樣にいたしましたならば大方の冬はこれで充分です。毛布で直接小兒を包むのは小兒の顏などを刺したり、又埃を多くいたす等の弊害の伴ふものです。小兒殊に呼吸器を病める小兒に塵埃は尤も厭ふべきものゝ一つです。

上へかけるものは此の位にして敷布團の方は出來る丈け厚くいたして置く方が、保溫上にも又疊の上を浮游してる塵埃の呼吸を豫防いたす上にも必要な事です。

塵埃の豫防並にその弊害に就ては又別に章を代へて御談し申しませう。

健全な小兒を無暗に暖かくした夜具の中へ寢せると云ふ事は健康上極めて弊害の

多き事で小兒の就寢の目的を阻害し、消化器の作業を害して一般に虛弱なる兒といたして終ふ事のあるものです、御注意までに申添へて置きます。

炬燵にて起る炭酸中毒

冬の夜寒に太郎さんは祖母さんと炬燵に當りながら、いろ〳〵とお噺を聞いて居る、晩餐を濟した父上は湯殿に浸つて觀世の隅田川を謠つて居られ、母上は下女を相手に勝手元にて後片付けをして居られます。

宵から出た北風が家に當つて、家根を越して表の電信線で捻れてビュー〳〵と叫を上げて吹いて居ります、風が家に當つて戸障子の鳴るたびに太郎さんは段々深く炬燵へ身體を差入れてゆきます。

「お祖母さん、それから」

と噺の次を催促する太郎さんの聲の方に眠氣が充分增して來た頃、祖母さんも

コクリ〳〵と居眠が出て來ました。太郎さんは詰らなそうに横に眠て終いました。風引かせてはならぬと祖母さんが居眠りから醒めたとき、グイと引いた布團は太郎さんを頭から包んで終ひました。安心した樣に祖母さんは居眠を續けます。

湯殿から父上が出て茶の間で番茶を飲んで居ます。母上も勝手の片が付いて手を拭き〳〵茶の間へ出て來られて、何かとその日の出來事などが靜かに交換されて居ます。

勝手の濟んだ下女が座敷へ布團を布いてます。うた〻寢の太郎さんも程なく座敷へ運ばれて行くでせう。時計が今九時を打つた。

風も稍々凪ぎて犬の聲のみに冬の夜の漸くに更けゆかんとするの時、炬燵に布團被りて寢り居たる太郎さんが、櫓も飛べよと計りに跳ね出して、その儘ウムと人事不省となつて終つたのです。居眠りより覺された御祖母さんの驚きの聲に、集り來りし兩親の驚きが思はず下女を叱り飛ばして醫師へ走らせる、水を顏へ吹

きかける。名を呼んで見るが太郎さんは癲癇持が引附けた樣に反り返つて眼を白くしてウン〳〵云ふばかりです。

かゝる間に醫師が驅付けて來ました。醫師は經過を聞き診斷した上で、これは炭酸中毒で布團を被つて長く炬燵の中に居たのであらうと診定いたしました。胸を開き胸部を摩擦して居る內に、漸次氣分も判然といたして參りました。ヤレヤレと一同が愁眉を開きましたのは十一時近くでも有つたでせうか。

幸に太郎さんのは炭酸中毒で未だ輕度なもので有つたのでした。これが更に進んで酸化炭素中毒であつたならば、到底かくの如く手輕に治癒する事は出來ず、或はあの儘回復いたさなかつたかも知れません。

寒からうで心なく引き被せた布團が時にかくの如き害を來させる事があるのです。

子守の話

一　子守は育兒上の母の助手なり

子守は單に母の脊の代理であると云ふが如き簡單なる役目ではないのです。脊に預かりし兒の些細なる行動までを常に看視しつゝ異常の有りや無しやに留意し、稍々長じたる兒に隨ふときは常にその兒の遊戯に就て嚴重に監督して過失なからしむる樣注意せねばならぬ等子守の役目は中々に重大なものです。

故に子守は重寶なる乳母車位に考へておくべきものではなく、母の育兒上の助手として充分に重くその職責の一通りならぬ事を當人に知らしめることも必要ですし之れを使ふ方にも充分の覺悟を要する譯です。

二　助手の良否は母の責任

子守はかくの如く家事上に分たねばならぬ母の育兒上の手の不足を補ふ職務を持つて居るのですから、一日の中幾時間は母の代理として小兒を預けられて居るのです、故に育兒上充分なる智識を備えて居らなくてはならぬものなのですが、時に隨分と亂棒な子守を見懸ける事があります。兒童が現に健康を害ふて居るのに平氣で居ると云ふが如きも、要するにそれに對する智識を持つて居りませぬ爲めでありまして、之れ等はその母が子守を充分に教育してやらぬ結果なのです。責任は當然母に歸すべきものです。

投げられたる石を脊の兒に當てさせまいと身を以て之れを防いだと云ふ子守の美談も、要するに石が脊の兒に當りては負傷すると云ふ事實を的確に知得して居るがゆゑに、かくの如き美しき行爲が無意識の中にも表はれて來るのです。子守に如何に美しき心情が有つたからとて、それが預かりし兒に對してかく〳〵の災害を及ぼすものだと云ふ既得の智識がない上は、投げられたる石によつて前額に瘤を出かす

以上の災害が小兒に降りかゝつて居ても平然として居る譯です。故に小兒の健康上に就てかゝる不注意はかくの如き災害を小兒に及ぼすものである、かくの如き汝の行動が時に小兒にかくの如き傷害を及ぼすものであると云ふ事を條理を盡して充分會得せしめて置くならば、比較的純なる小女の胸に深き印象を與へて、小兒の災害を幾分なりとも減ずる事が出來るものです。

子守の良否は母のこの責任を盡すと盡さゞるとに關するものだと云ふ事を忘れてはなりません。

三　子守に因りて受くる兒童の災害

不良なる若しくは無智なる子守によりて兒童の災害を受くるの例は極めて多いのです。

イ　冬は容易に感冒を引かせる

忙がしき儘に暫く外にて遊び來よと脊に負はせ出した兒に、子守は場所も係はず寒風の中を歩き廻して、寒風に砂塵を混じて充か吸込ませたり。脱げし帽子に頓着もなく小兒の薄き頭を冷却せしめたりする事もあります。又時に勝手に寺や神社、駄菓子屋の椽先などの火の氣なき風の吹き通す場所へ脊より下して濡れた襁褓を不手際に取換へたり、足や尻を曝さして長時間放置したりする事さへあります。又氣をきかした積かなぞで、寒風の吹き荒む街道の溝なぞへ尻を出して放尿せしめたりしてる子守なども數々認める處です。

かくして立派に感冒を引かせ、追ては重大なる呼吸器病の原因たらしめる樣な事例は決して珍らしい事ではありません。

ロ　夏は重症なる腹こわしを誘致す

子守を出してやるときに子守への慰勞としてやら、小兒への手當料としてやらに何錢かを子守に握らせて小兒を外へ遊びに伴れ出させる例もあります。之れが意外の災害を來す場合があるものです。子守が喰して何等の害をも來さゞるものが兒童には恐るべき結果を來す事のあるものです。

子守が錢を握つて菓子やの店頭に至りしとき、兒童が菓子を撰擇するも、子守が隨意に菓子を求むる場合にもせよ、何れも兒童の胃腸に關して大した顧慮が用ゐられてある場合は少いものです。かくて彼れ等の隨意に任せた菓子が兒童の腸胃を甚だしく損傷せしむる例も少くはありません。

兒童が菓子を欲せざる即ち十ケ月以前位の乳兒に對して、子守がその啼泣を止めんがために、手にせる芋や餡を哺ませる事などのあるものです。之れは夏に限らず

とも意外の災害を兒童の胃腸に蒙らせる事があります。

又外に出すときに牛乳瓶を持たしてやる母などがあります。以の外の事です。照り付ける夏日に牛乳瓶を振り曝して、立派に牛乳を腐敗せしめ、それを時を撰ばず乳兒の口へ哺ませて居ります。之れ等も如何なる結果を招來するかは想像するも肌に粟を生ずるほどです。

間食を唯一の樂として居るは子守等の境遇として當然の事です。子守等の間食の御招伴を兒童にせしめぬ樣に、豫め充分に警戒せぬは母親の罪です。

ハ　子守は傳染病の媒介者です

子守が數名ある神社の境内で遊んで居ります。社殿の南に面したる暖かさ椽に、背より下したる小兒を集めまして、自分共も歌なぞ合唱しつゝ遊んで居ります。

この小兒の内に一人、百日咳の兒があります。頑是なく遊んで居ります内に、時

々突發的に咳を發して、顏色を變へて咳き込んで來ます。その咳込みます度毎に、子守達は交り代りに抱いて脊を撫で、臀部を叩いたりしてやるのです。その際この兒の咳と共に吹き出す唾液の飛沫は、その子守達の胸やら膝やらへ附着いたすのです。或はその周圍に遊んで居る子供達の頭から吹きかゝることもあります。

又この子供の內に猩紅熱を經過いたしました計りの子供が一人あります。吹出したる後の皮膚は未だ全く元の樣になつては居りません。然しこの兒は極めて元氣です。ヒョコ〳〵と歩き廻りまして子守達の膝へも乘りますし。子供達の間を彼方此方いたしてます。その度毎に子守の膝や子供の衣服なぞへ、黴菌を澤山附着させて居ります。尤も感染力の强い剝げたる皮膚がぽろ〳〵と落ちるのです。

かくて二時間ほど遊んで居りました後に、一人歸り、二人歸りして、各自はその感染いたしました病毒やら、黴菌やらを我が家へ持ち歸りました。

かくして寺殿の椽に樂しく一日遊び暮した小兒達は、充分に病毒を吸入して、何

れも遠からず、幾日かの潛伏期の後に、百日咳なり、猩紅熱なりを發するのです。

三　意外なる外傷を蒙らしむることあり

自分の遊び事に心を奪はれたり、危險なる場所へ出入したりして、飛んでもない外傷を兒童に蒙らしむることなぞの例も決して珍らしい事ではないのです。

子守自身が既に怪我の尤も仕易き年齡のものが多いのですから、之れに脊負はれ若しくは看視を受けつゝある兒童に危險の多き事も論なきことなのです。故に此の點に於ても充分子守に注意を與へ、危險多き場所へ出入せしめざる樣に申傳へて置かねばなりません。

或る白痴に近き子守が主人より好遇せられざるを怨みて負はされて出て來た脊の兒を怨みの片割れとして古井戸へ投入したと云ふ恐ろしき例などがあります。かゝる例は稀有の事には相違ありませんが、時に無智な子守が泣く主人の兒を煩し憎し

と耳を引張つたり、瓜を立てゝたりして居るのを見ることなぞあるものです。

預かりし兒に子守の愛が及んで居ないのは極めて危險です。敬愛する主人の愛兒として大切に之れを保護し看視して居て臭れるのと、怨の片割れとして坊主憎けりや袈裟まで憎い的の心情を抱いて主人の愛兒を預かつて居られるのと、監督の上に非常の懸隔を生ずるものなのです。故に子守に對する主人の態度も餘程大事なものですし、主人の溫情に浴して居ない子守に愛兒を預けると云ふ事は餘程考へねばならぬことゝ思います。

四　常に看視を怠る勿れ

子守はその年齡の如何に拘らず、兒を預けて自分の眼から離して終ふときは其處に何等かの危險が附隨して居るものだと云ふ事を忘れてはなりません。故に假令へ自個の眼界より離れて居ても、その子守の行動に就て常に深い注意を拂い、現に何

處で如何なることを爲しつゝあるかと云ふが如きこと位は常に知つて居て欲しいものです。

又如何に家事が繁多であらうとも寒風の吹き荒む外へ愛兒を子守の脊に托して追出すと云ふが如き心なき業や、梅雨期の駄菓子屋へ子守の撰擇に任せて愛兒の菓子を買はせに出したり致すことは返す〳〵も警めねばならぬことです。

出來る丈け眼界より離さぬか、眼界より離さねばならぬときは充分子守が信用するに足るものか、若しくは毎度に充分なる注意を與へて後に出すことゝせねばなりません。

先づ子守の事に就ては此の位に致して置きませう。子守に次で乳母車の事を少し御咄し申ませう。

子守は自分の遊びに背の兒を忘れる

今日は正月の十六日閻魔様の賑い日です。一年に一二度より著ぬ晴著に小僧さん達は、暖かさうな顔付きで、三三伍々、北風に黄塵の高さ都大路を手を引き合ふて歩いて居ります。松飾は既に取り去られて居りますが、正月の氣分は十分に漲ふて居ります。

東京は山の手の塲末新宿の裏通りの大久保町に接した處は官吏、軍人の住宅の多き處です。此の中に一軒、私の御話申さうと言ふ、或る軍人の家庭がありました。御子供が三四人もありまして、御主人は陸軍の佐官だとの事。奥様は未だ三十代の御元氣の方です。女中が一人に使走りやら子供やらに十三になる少女が一人、外に御年寄も居られませんが、御子供方が皆様元氣で極めて賑かな家庭です

今日は御客様があるので家の内は何となく忙がし氣で、昨年夏に御産れになりました御孃さんも何時もの様に十分に母様の御膝へ抱かれる暇がありません。そ

の不平で自然に泣聲も多く出ますものですから、唯さへ御氣の忙しき中とて子守に負はせて、暫く外へ行く様にと出して終はれました。

子守は泣く御孃さんを脊にして外へ出ました。儘になるならば今日は正月の十六日である、貧しきながらも我家にあらば妹を連れて閻魔様へ遊びに行くものを活動寫眞でも見物し得るものを、今頃は我が妹などは何をして居るやら、今年は自分共も何日に遊びに出して貰へるやらなどと、考へつつ足は自然に大通りの方へ向いて行きました。天氣は上々に晴れてるとは申せ北より吹く寒風は頬を切つて行く様に感ぜられます。吹き上ぐる塵埃に混りて、大宗寺の閻魔様より聞えて來ます活動寫眞の樂隊やら、見世物の太鼓の音などが、自然と足を引いて行く様に感じます。背の御孃さんは未だ泣き止みません。背を振りつゝ少女は足を早めました、一寸と此の間に閻魔様の賑かさを概況なりとも見て來たしとの願です。

四谷より青梅へ甲州へ通ずる新宿の街道の道は兩側に貸座敷の高樓が竝びまし

て、常々人車の往還の繁き街が、今日は殊更に人道には露店が連なりまして、樂しげな宿歸りの晴著きた人々で滿されて居ります。電車の響、客呼ぶ聲、ラッパ太鼓に、御堂でたたく鐘の音なぞ、眼に入る世界の混亂たる樣に比して、耳に入る音響の世界は更に雜然たるものでした。御嬢さんを負ふた少女は、此の混亂せる世界へ出て、ホッと一息して周圍を見廻しました。自分と同じ樣な年頃のものなぞが、新たに結びし髪に赤に紫に美しき帶なぞ締め、豐かなる財布を開き、何に彼と買ふて居る樣なぞ見ますと、溜らなく美しくもなりました。美ましい氣に此の人々の後につきて、足は自然に音響の最も高き音を擧げてる太宗寺の境内へ來ました。何處とかで取れた大蛇の見世物、猿と犬とが芝居をすると云ふのやら、活動寫眞で宮本武藏が武勇傳なぞ、何れを見ても面白さうなの許りです。一錢も持たぬ自分は何れを見やうとも叶はぬ事ながら、何れも此處へ來た人の彼れにせんか、此れにせんかと迷ひつつ看板の前は人が澤山に立つて居ります。せめては

看板なりとも、隙見なりともして見たしと少女は同じく此の混雜の中に立つて居ました。一時泣き止んで居た御嬢さんは人に押さるる苦しさでか、又泣き出して聲も嗄れさうです。少女の耳へは此雜然たる音響の世界にありては平常ほどに御嬢さんの泣聲も苦にはなりません。人混みに押され押されつつ、各見世物の前に或は十五分、或は二十分と立つて手を引き合ふて見に入る人々を羨しと見て居ます。漸くに少女の足が境内より離れて電車通りへ出て來ました頃は、冬の日足の早く、何時か街道に電氣の著いたのが眼に入る樣になりました。更に露店に彼れ此れと高聲に物賣るものを覗いて居ました少女の頭にも、漸く時間の經過した事が浮んで來ました。我れに返ると共に驚きと恐れとを抱きつつ、急ぎ我が家の方へと小走りで歸つて來ました。北へ向つての歸途は、日足の傾いた北風に強さと寒さとが加はつて、人中に押されて居た少女の身體に寒さと空腹とをヒシ〳〵と感ぜさせます。背の御嬢さんは思は同じ寒さと空腹に相不變力なき聲で泣き通し

て居ます。叱からるるを承知しつつ歸つた主人の家では、既に來客も歸つた後の我が兒を待ちあぐんで居た奥様より、果して大に叱かれたのです。

背より下されたる兒は母の顔を見て、更に嗄れたる聲して泣きつづけます。涙に濡れたる頰は、北風に吹きつけられて赤く輝が切れてます。泣きしやくりつつ飲む乳にも、何時か暖かくなりましたものか、小兒は暫にして眠りに就ました。

空腹を抱えつつ北風に吹きつけられて、十分に砂塵を吸ひました兒は、感冒を引きましたものか、その夜より少し熱が出まして、鼻水を出し、何となく呼吸苦しげです。翌日の午後に漸次に熱が上昇いたしました。迎へられたる醫師は加答兒性の肺炎だと診斷を下したのです。

家族の驚きは一通りではありません、今更らに子守を叱つたところが何んともなりは致しません。遂に小兒は醫師の注意によりて入院いたしました。加療よろしきを得ました爲めか、小兒は幸に治癒いたしましたが、全く醫師の手を離れま

したのは、其の後一ケ月も後の事です。

子守は自分の遊びに夢中になりて、かくの如き害を愛兒の上に及ぼす事のあるものです。

子守と乳母車

乳母車と云ふものはあまり結構なものでないと自分は常々思つて居ます。されば と申して電車に遠き場末に住みて、一寸とした用達しに出かけるに肥えたる我が兒を負ふて行くよりも、冬は布團に包みて、夏は日被ひを懸けて乳母車を押して行く方が何んなに樂だか知れません。三つ四つになつた兒が買物に出る後を慕ふて泣きますとき、歸りは數々の品を抱えて來ねばならぬとき、到底始終は歩んでは呉れぬ兒の、三貫以上の身體を更に負はされては自分の身體が續きません。かくて主人に買はせた乳母車は是非なく必要のものに相違ありません。

母の眷の代理に用ゐらるゝ乳母車は必要なものに相違ありませんが、子守の眷の代理を勤める乳母車は時に不測の災害を招く事があります。

梅雨の此頃にしては珍らしいと云ふ快晴の或る日の事です。今年三才になる愛くるしき女の兒を乳母車に乗せて、十六七になる子守が坂道を下りて來ます。麹町區と山の手とを連鎖する牛込見附より神樂坂へ通ずる、車馬の往來の繁多な街道を、暑き西日に照りつけられて子守は汗を流しつゝ、神樂坂上なる主人の家へと急いで行きます。午後を早くより家を出で九段の境内で小供を遊ばせて居たのです。時は既に四時、小供は遊び疲れに空腹を覺えて母の膝の戀しくなりしものか、先程より頻と泣きつゞけます。子守は暑さと泣く子に氣をイラ〳〵させつゝ益々足を速めて居ます。演習を濟して聯隊へ歸る兵隊の一連が見附の内へ通つて行きました。學校の放校時間、勤人の歸る頃です。往來の人は繁くして、飯田橋へ、四谷見附へ走る電車は何れも客を滿載して居ます。

かくて子守の押す乳母車が見附の坂を半分以上も下つて來ました時、一輛の馬車が見附の中より表はれました。人の來るを左へ避けつゝ、往く人を後より押しのける樣にして見附の坂を下つて來ました。馬丁の叱咤する聲に走りよけた人々の間から馬丁の鼻先へ現はれたのは乳母車を押してる子守の姿です。自分の聲には總てのものが道を開くべきものと定めて居た馬丁には此の逃げ遲れた子守が、甚だ間遲けな鈍物に見えたる相違ありません。馬丁の癪に觸れた子守は一喝を喰はされると同時に突き飛ばされました。子守の身體は乳母車を握った儘で顚倒しました。意外の災難を蒙つたのは車の内の小女です。車と共に車外へ投げ出されて左頰一面を硬き土で擦り剝いたのです。少女がワッと泣き出した頃には馬車は既に電車道を越して神樂坂の方へと進んで居ました。附近に屯して居た車夫なぞに救けられて少女は兎も角程遠からぬ我が家へ送り屆けられたのです。大した負傷でなかつたのが何よりであるとは申せ、少女はその夜より二三日發熱して兩親

を少からず案じさせました。

年若き子守が乳母車を抱えて當惑して居るものを、一喝と共に突き飛して、その倒るゝを見て無斷に過ぎ行くと云ふ馬丁の橫暴それを車上にありて知るや知らずや傲然と構へて居たと云ふその車上の主人の非常識は別として、乳母車の缺點の一つは此の馬丁の叱咤の聲と共に、その愛兒を引抱えて速刻に安全の地へ移す事の出來ぬと云ふ點です。身體の身輕なものでも今日の東京の如き街路の狹くして馬車の雜沓せる處を歩いて居りますと、電車に轢かれたり自轉車に打つかられたりする事は珍らしい事ではないのです。その混雜した街道へ乳母車と云ふ荷物を持たして、未だ理智の充分に發達せぬ子守に大切なる愛兒を任せて置くと云ふのは、寧ろ兩親が無暴と云はねばなりません。

母なり父なりが監督して居るか、左もなくば人通りの少き町かでない限りは、往來に乳母車を出すと云ふ事は考へねばならぬ事です。

猶ほ乳母車は非常に不安定なもので容易に轉倒し易きものです、次の樣な例もあります。

或若き母が四つになる兒と當才の兒とを乳母車に入れて、塲末の町から買物に出て來ました。不便の土地に住うて居られますのと、塲末には思ふ樣な品が賣られて居ないのとで、天氣さへ良ければ一日置き位に近接せる市の街へ買物に出られ彼方此方と眼に付く品を買ひ調へては歸て行かれるのでした。その際は常にゴム輪の大きな乳母車は二人の愛兒の乘物たると同時に買物をも積み込まれると云ふ次第で、何時も此の乳母車は影の樣に此の若き奥樣に押されて居るのでした。

三四月の暖かき日乳母車は幌を取り除かれて麗かな春光は二人の可愛らしきお兒さんの頭上を照して居ます。兒さんは鳩ポッポの歌を母さんに調子を取つて頂いて、家を出てから街へ來るまでに何度も〳〵繰返して居たのです。

車を或る店頭に止めて於いて、奥さんは買物にその店へ入られました、此店は洋食品の雑貨店です。此處では何時も兄さんの好きな西洋菓子が買つて頂けるので靜かに待つて居られるのが常でした。然し兄さんの厭なことは此の店の近所に牛肉屋が有つて、その店先に何時も大きな犬が二三疋ゴロ〳〵してる事です。その二三疋がゴロ〳〵して居て呉れる丈けのときは別に心配にもならぬが、時に此方へ歩いて來たりすることがありますと、慄へ出して恐がります。

何時も母さんに車を押されて此の牛肉やを通ります度に「母さん犬なんか恐くはないやネー」と、定つて同じことを繰り返して、自ら勇氣を附けるほど此の牛肉屋の犬は苦になるのでした。今日も母さんが洋食品屋へ入られた後は、鳩ポッポの歌も止めて一心に牛肉やの犬の動靜を注視して居ました。然るに今日は犬共がゴロ〳〵して居ないでノソ〳〵として居る。ゴロ〳〵と寢轉で居て呉れるのなら大事ないが、ノソ〳〵と歩いて居て呉れては心配でならない。彼方向いてノソ

〳〵して居るのは良いが、此方向いてノソ〳〵されては困る。此方向いて犬が一二歩進むと兄さんは腰を浮して逃げ仕度をするのです。その内に何を目當てにか一番厭らしい赤斑の大犬が此方の方へ來る。今引き返すかと注視してるに引返して行く樣子は更にない、段々と此方へ來る。兄さんは吃驚して終いました。ワッと泣聲を立てゝ乳母車の内へ立上つて終つたのです。その立上つた音に妹さんはフト眼を覺して何事が起つたのかと云ふ樣な顏をしてると、間もなく乳母車は洋食品店の方へ向つて横倒しに轉倒して終いました。立上つた兄さんが乳母車の椽に手をかけて、母さんの方を向いて身體を傾けたものですから、不安定な乳母車はその儘横倒しになつて終つたのです。手布に包まれて居た妹さんは一間ほどゴロ〳〵と投げ出されました。兄さんは額を擦り剝いて大な瘤を一つ出かしました。幸に此の下に硬い石の類など無かつたゝめに、二人とも大した怪我もなく、膽を冷して走りついた母さんも幸に大過なかつたのを神に感謝しました。

此の失敗に恐れを抱いてその日は買物もソコ〳〵に奥さんは家へ歸つて終いました。歸りつゝも若しあの時角ある石でも澤山有つたならばと、その結果なぞを色々と想像しつゝ、幾度も胸を冷したと云ふことでした。

乳母車はかく不安定なるものにて、三四才の兒が立上つて一方へ身體を傾けますと、容易に轉倒し易いものです。故に二才以上の立上る事の出來る兒を乳母車に乘せましたときは、常に此の點に注意して眼を離さぬ樣に致しませんと、意外の外傷をさせることのあるものです。何卒御忘れないやうに。

兒童の外傷

一　眼の離されぬヨチ〳〵歩き

匍ふて居た兒が物を便りに立つ樣になり、立てたかと思ふ內にヨチ〳〵と歩む樣になるとき、尤も多く外傷を仕易く寸時も眼が離せませぬ。

一寸と油斷をして居る內に火鉢の椽を握つて立ち、煮え立つて居る鍋を轉倒させて全身に熱湯を浴びたり、爐の中へ落込んで大火傷をしたり、椽先より轉り落ちて敷石で額に大瘤を出かしたり、梯子段から落ちる、二階から往來へ轉がるなど四六時中ヒヤ〳〵させて居ります。匍ふ位の兒童は體重に比して頭の重味の大なるものです。故に椽先等へ匍ひ出して下を覗いたりして居りますと、頭の重味で身體は容易に宙返りを致します。

兒童が外傷するのは高低の甚だしき場所とのみは限りません。疊の上の外傷と申

す諺もある様に、高低の場所のなき座敷の中で時に大外傷を致すことのあるものです。此れは場所に高低はなくとも兒童の身體の重心が常に浮動して居りますためです。即ち一寸としたことにも轉倒いたしますために不慮の炎害を受けるのです。手に持つたる火箸にて眼をついたり、ブリキのラッパの上へ轉びて額に裂傷をしたりします。

さればかゝる兒童の周圍の高低に就て常に注意を拂つてやると同時に、その手に持つてるもの即ち玩具の類に就ても大なる注意を惜んではなりませぬ。

二　往來での遊戯

尤も注意してやらねばならぬのは往來での遊戯です。自轉車自動車の往來頻繁なる街頭で遊んで居りまして不慮の外傷をいたしましたからとて、自轉車自動車の操縱者の罪と申すことは出來ません。多くの場合乘り手の方が專心に注意して居りま

すとき、強いて兒童の方でその行手へ驅け込むのです。

往來の中央で石蹴りなぞをして遊んで居るとき、一臺の自動車が走つて來ます、ブーと云ふ警戒のラッパに一團の兒童は左右へ道を開きます。道が開けたからと安心して自動車が走りますとき、一度右へ避けた兒が突然に左側へ走り出すことがあります。之れ等は乘手も何とも致し方なく不幸にして車輪に觸れしめて終います。

往來で兒童が遊んで居りますとき、一種の冒險をして喜んで居ることがあります。それは走り來る車や電車自動車なぞを一定距離まで來たのを見定めた上で、その前路を走り拔けようとするのです。覺束なき足元にてヨチ〳〵と走り拔けるとき、片側に立ち併んでその友が手を握つて見物してるのです。一人が成功したとき他の一人も負けじと競走いたしますが、不幸にも自分の速力と電車なぞの速力との側定を誤つたときは車輪に轢かれて終はねばならぬのです。かくの如きことをして遊んで居るのは決して珍らしいことではありません。殊に尤も多く電車に對して行はれる

のです。電車通りに近き親達は注意いたさねばなりません。

往來で遊戯してる計りでなく、十才以下の兒童に繁華なる街の獨り歩きをさせては、同じ様な不慮の災害を受けることのあるものです。

三　外傷に對する手當に就て

大きな外傷をしたときは多くの場合は、驚いてその儘醫者の家へ引抱へて行きますが、一寸とした傷にて我が家にて手當が出來るものと信ずると、大方は手療治をして終います。然しこれに就て多くの失敗の例がありますゆゑ、二三御注意申しませう。

外傷に石炭酸とは古くより結び付けられて、特効のある藥の様に考へられて居ります。石炭酸は劇藥でありますから素人の方の手へ如何なる經路で入るかは存じませんが多くの家庭にあるものです。何倍かに薄められたる此の石炭酸を備え置きて

兒童が負傷をしますと、直に之れで洗ふてやります。石炭酸にて傷口を洗ひ繃帶をして置きますと多くの負傷は治癒するものと考へております。然しこれが大なる失敗となる場合が多いのです。

人間の身體が外傷を受けましたときには自然に傷口が閉ぢて治癒すべき力がその身體自身に存じますものです。然るに其處へ膿を造る黴菌が侵入いたしますと、その傷口にある血液等を榮養として直に繁殖して膿を造り出すのです。故に傷口の尤も大事な手當は此處へ黴菌を侵入せしめぬことですが、石炭酸を外傷に用ゐますのも一つは此の黴菌を殺すのを目的として居るのです。然し現今の外科の實地上の經驗では宜しからぬ方法として用ゐられては居らぬのです。傷口を石炭酸で洗ふのは唯にその目的を達し得ぬばかりでなく、却て傷口へ黴菌を流し込む危險のあるものとして、今では山奥の醫師でも用ゆる人がなくなつたほど、古い昔しの手當の致方です。何故かと申しますのに一寸の傷口があつたといたしますと、傷口へ侵入いた

しました黴菌はその一寸の傷口に當る皮膚に附着して居たものが押し込まれたのです。然もその黴菌の大部分は既に流血と共に洗ひ出されて居ります。然るにその傷口を石炭酸で洗ふといたしますと更にその周圍の皮膚に附着してる黴菌をも同時に傷口へ流し込む樣なことゝなり、目的に反するばかりでなく、却て傷を膿ませて終ふことゝなるのです。石炭酸が殺菌するではないかとの疑も起りませうが、何倍かに薄めて傷口を洗ふに適して居る樣な石炭酸では既に短時間に化膿菌を殺すだけの力はないのです。故にこの殺菌力なき石炭酸にて洗ふときは前にも申した樣に廣き皮膚の面より黴菌を傷口へ掃き込む樣な結果となるのです。

又石炭酸にて傷口を洗ふとき、その膿い薄いは別としてその人の體質に因りて直に劇しき壞疽を起して傷口を中心に、その周圍を腐らして終ふことがあります。

學校などにてこの石炭酸水を貯藏し置きて、兒童が負傷したるとき教員が之れでその傷口を洗ひ、繃帶をしてやらるゝ方などがあります。勿論一時的の應急手當とし

して致さるゝには相違ありませんが此の石炭酸にて一度洗滌された傷口は誠に治療のいたし惡く、且つ化膿し易くて大に醫師を困らすものです。

應急手當としても是非とも傷口は出血を止め乾燥せしめるのが一番目的にも叶い又最良の方法なのです。故に石炭酸の用意位をしておかるゝ程の方は、先づ石炭酸を排してヨードホルムガーゼ、若しくは昇汞ガーゼを用意して置かれるがよい。兒童が外傷をしてたときは直にこのガーゼにて傷口を押へて上から繃帶をして置くのです。かくした後に大なる傷であるならば醫師の元へ連れて行かれるが良い。かゝれば醫師も手當いたし易く、傷も化膿することが少く治癒するのも早いのです。

殊に擦過傷の如きは多くはこの儘にても治癒いたします位で、一寸と擦過傷が大な外傷となりますのは多くは洗つたり、石炭酸を附けたりいたしますためです。

一寸とした傷口だなどと思い、その傷口の長く化膿して治癒せぬものなどを等閑にしておきますと、その傷口より惡しき黴菌が身體の內部へ吸收せられまして重き

腎臟炎を起し全身に水氣が來て倒れることのあるものです。注意せねばなりません。

石炭酸に限らず、傷に効ありと稱する賣藥類なぞも同樣に避けねばならぬことは申すまでもありません。

子守の不注意から愛兒に大怪我をさせた例

或る地方の本願寺別院の御堂で出來た事です。何處も同じく御寺の境內は子供の遊び場になつております。

或る暖かさ日のことです。午後の靜かなる境內に何時もの樣に大勢の子供が遊んで居りました。御堂を取り卷く椽側には未だ一人では充分に歩めぬ子供たちばかりが數名子守に連れられて遊んで居ました。

此の椽側に遊んで居る兒の一人に、土地で有名なる呉服店の當年二才になる兒

が居ました。十五になる子守に連れられて毎日の樣に我が家より程遠からぬ此の御堂へ遊びに來るのでした。今日も母の乳を充分に飲された後一二時間此處で遊んで居る樣にと、我が家を出されて來たのです。

花も散りて青葉の漸く濃からんとする境內には、白き鳩の群にまじりて鬼ゴッコする小供の身も輕う見えます。折しも土地の芝居小屋へ此度かゝつたと云ふ大阪役者の町廻りが門前を通りました。二十臺ほどの車を連ねて赤やら紫やらの旗を立て、最先の車には若い男が太鼓をたゝいて居ります。

太鼓の音を聞きまして境內に遊んで居た總ての歩めるものは何れも門前へと走つたのです。何事の起りしかを辨へぬ御堂の屋根の鳩と、椽に子守より見放された乳飲兒たちとは走りゆく人々の後をポカンと詠めて居りました。

町廻りの役者の一群は門前で車を止めて、何やら長々と口上を申して居ります。門前に集つたる人、表通りの商店の人々、道行く人々、何れも鳴を靜めて謹聽し

て居ます。

椽に殘されたる乳飲兒たちは、待てど歸らぬ子守たちを慕いまして、一人二人は既に泣き出しました。椽先まで這つて出て門前の方へ向いて大な聲して泣いて居る兒もあります。然し口上を謹聽してる子守たちの耳へは達しません。

呉服屋の子も椽先まで這つて行き、此處にて暫く泣いて居りましたが、何時か泣聲を止めまして、手摺りの間から半身を出しました。半身を出して間もない事です、何とした調子でか此の男の兒の身體は空を一廻轉して、四尺ほどの高さの椽より敷石の上へストンと落ちて終いました。幸に尻を下にして落ちましたのですが、グッと云ふて落ちたなりに暫時は泣聲も出しませんでしたが、一シキリして火の付く樣に泣き出しました。

門前の町廻りは役者の名やら、藝題の荒筋やらを長々と辯じました後、木の頭を合圖に又太鼓を鳴らしまして、次の町へと繰り込んで行きました。門前へ集つ

た人々はワッと喚聲を擧げたる後、又もや吾れ先にと境内へ引き返へして來ました。椽より落ちた呉服やの兒が火の付くやうに泣き出してから五分ほど後のことです。

椽より落ちてるのを見た子守の驚きは一通りではありません。走り寄つて抱き上げまして、幸に大過なかりしを喜びつゝ、彼方此方を抱き歩みつゝ兎も角も泣聲を止めさせんと致しますが容易に泣き止めません。或は鷄の近くへ連れて行き、或は手洗場の水を見せたりいたしましたが、中々に泣き止めません。かくて猶ほ二三十分間彼方此方と連れて居ましたが、多少とも泣聲の靜まりしを待ちて主人の家へ歸て來たのです。勿論今までに起りし事件に就ては一言も申しはいたしません。

男の兒は何事も辨へざる母の胸に抱かれて、暫く寢に就きましたが、時々怯える樣になつては泣き出します。襁褓でも換へやうとすると足を縮めて火の付いた

様になきます。足を何とかしたのかと檢しましても別に何ともない様です。然し其の夜からです、高い〳〵熱が發しました。驚いて醫師を呼びましたら、判然と診斷は付かなかつた様です。翌日の午後になりました處が、小兒の腰の右側の處が赤く膨れ上つて居るのを母が發見したのです。更に醫師の診定を受けますと胯關節の炎症であらうと云ふので、その腫れたる處へ色々の藥なぞを塗りました。かくて幸にして二週間ほどの後に熱も去り、腫れも引いたのです。

別院の御堂の椽より此の愛兒が落ちたと云ふ事を耳にしたのは、それより餘程後の事でした。

かくて全治して終つたのならば何の事もなかつたのですが、此の男の兒はそれより一年過ぎ、二年過ぎても歩みません。扨ては椽より落ちたる時の損傷が未だ全く全治しなかつたのであらう。男の兒を此の儘に足腰の伸ばせぬ樣な事にしては申譯けなしと兩親の心配、配慮は一通りではありません。京都の大學の診察を

受けるとか、何處とかの溫泉は打身に宜いとか申して、少からぬ費用をかけたのです。大學でのX光線の診斷によると、腰の關節に異常を來して居る、されどかく年少きものを今に於ては手術の施しかたもない、成長を待つより外に致し方もなかるべしとの事でした。

かくて兩親の熱誠が通じたのか、五才の時より不完全ながらも歩行し得る樣になつたのです。十才を經過しました今日では、全身の發育は多少阻害せられて居りまして、完全とは申せませんが、外觀上見苦しからぬ程度で歩行する樣になりました。

無心に行ふた子守の手ぬかりがかくの如き恐ろしき結果を來したのです。かゝる例は常々珍らしき事ではないのです。

ゴム風船にて窒息した兒

本郷の或る靜かなる街に二人の愛兒を持つた若き夫婦の方が、一人の下女を使つて平穩なる月日を送つて居りました。五つになるは姉の靜ちやんと云ふ兒、敏雄さんと云ふ可愛らしき弟の兒は當年二つです。父さんは役所へ出かけて御留守母さんは御庭で、洗濯物をして居らつしやいます。下女のおたけは勝手で晝食の用意をして居ます。かれこれ午前十時半頃です。

靜ちやんは何時でも敏ちやんに對しては、大に姉さん振つて何かと遊び相手になつてやります。然し時々御機嫌取りに敏ちやんの鼻の先へ出した菓子を取られて、急に泣き出す事もあります。それは別として今日も母ちやんに代りて敏ちやんの遊び相手になつて居りました。六疊の坐敷で足をなげ出して坐つて居る敏ちやんの前へ、あらん限りの玩具を陳列いたしまして機嫌よく自分も遊んで居ります。

靜ちやんにも敏ちやんにも一番氣に入つたのは數日前御親類の叔母さんが買つ

て來て呉れたゴムの風船玉に笛のついた玩具です。プッと吹きますと皺苦茶ゴムが膨れてその表面へ花の模樣が出て來ます。吹き止めるとビーとなりつゝゴム玉が縮んで行きます。

二人は餘念もなく遊んで居ります內に、靜ちやんの吹き方が强かつたのか、結び目の糸が弛んだのか笛とゴム玉とは離れて終いました。靜ちやんは泣顏をして母さんの處へ離ねた二つを付けて下さいと交渉をしに參りました。然し母アさんは今少しで洗濯物の終る處でした。後で付けてあげるゆゑに外の玩具で遊んで居らつしやいと申しますと、キット付けて下さいと念を押しつゝ、靜ちやんは坐敷の方へ歸りまして、又敏ちやんと遊んで居りました。

それから五分とは經ませんてしたらう。敏ちやんの泣聲がして、何やらばたばたと疊を蹴る樣な音がいたします。恰度洗濯物も一仕切付きましたゆゑに、母さんは坐敷へ戻つて見ますと、靜ちやんが顏色を變じて目を白黑させて七轉八倒し

で居るのです。母アさんの驚きと云ふものは一通りではありません。何か飲んだに相違ない、吐かせねばならぬと脊をたゝきましたが何の効もありません。母さんの呼ぶ聲に走り來た下女が、慌てゝ持參した水をのませても見ましたが、それも効がありません。兎も角も醫者を呼びに下女を出しましたが、靜ちやん何を飲んだのよ、吐き出してお終いと母アさんも泣聲を出しつゝ色々といたして見ますが靜ちやんはます〳〵苦しむ計です。樣子が段々あしくなりますゆゑに、醫師を待つよりも、此方よりつれて出るに限ると、泣く敏ちやんをその儘に靜ちやんを引抱へて醫者へと走つて行きました。半町ほどの醫師へ走り着いた時分には、可憐さうに靜ちやんの氣息は止つて居たのです。

醫師は口中へ鏡やら、鉤やらを入れて見ましたらゴム風船がヒタリと氣管の入口へ吸ひ付いて居たのです。それを取り出して後人工呼吸やら注射やらと色々といたしましたさうですが、何の効果もありませんでした。靜ちやんは、遂に再び

あの可愛らしき口を開かなかつたのでした。

河川多き街に兒を持つ親の注意

芝より深川の木場へ都合に依りて移轉して來た或る會社員がありました。五つと三つとの二人の兒を持つた未だ若き夫婦だけの極めて平和なる家庭でした。

引移つて來た翌年の二月末の暖かき日でした。主人は會社に出て居て、細君は朝から小供を相手に針仕事なぞして居りました處が、晝の食事時ともなりました故に、寢付いた三ッの兒を炬燵へ入れて、自分は勝手で食事の仕度にかゝりました。五ッになる兒はその時庭で遊んで居たと申す事です。かれこれしてそれより約一時間の後、食事の用意も調いし故に五ッになる兒を呼び入れて食事せんといたしましたが、庭に遊んで居ると思つて居た兒の姿が見えません。庭へ下りて見たら裏木戸が開いて居る。その儘裏木戸の方へ我が兒の名を呼びつゝ出て見ました

たが返事は元より姿も見えません。裏木戸を出ました處は松が二三本立つて居る空地でありまして、常々此處は木挽が來て木を挽く場所となつて居ります。その空地に沿ふて或る材木屋の木材を浮して置く堀があります。折から滿潮で水が土地とスレ〳〵にありまして、堀に充滿したる木材が岸に接して浮いて居りました其處等あたりを見廻して我が兒の名を呼んで見ましたが、依然として返事がありません。その空地を出て表通りへ出て見ました、表通りは材木の納屋が併んで居りまして、人通りの少き靜かなる町です、表通りにも見えません。納屋の材木の間などに遊んで居ないかと注意しつゝ若き母親は多少の不安を抱きつゝ、十二三間離れた處に二三軒ある家に我が兒の遊び仲間のある事を想ひつゝ、其處へ尋ねて行きました。居る樣な樣子もないが一應家の人に尋ねて見ましたが今日は姿も見ぬとの返事でした。母の不安は漸く大きくなりました、更にその周圍より我が家の近くの小供の通行し得る道らしき道は總て立入りて尋ねましたが見えませ

ん。恰度晝飯に歸宅して居た木材屋の若い者などの來合せしものにも依頼して、若しや堀などに落ちたのではないかと、その近所の堀と云はず納屋と云はず出來る丈け尋ねて見ましたが、堀に落ちたと云ふ樣子も見えねば、材木の下へ壓倒されたと云ふ樣な事も元よりありません。人の兒を盗むと云ふ話も聞かぬでないとその材木屋の若い人を頼み、又は出入する商店の奉公人を頼みて、要所へそれらしき小兒が通過せざりしやと尋ねさせましたが、それらしき話もありません。使を受けて主人も驚いて歸宅して來ましたが、依然として手懸りもなく、夫婦共々たゞ〳〵途方にくれて居ました。かれこれして三時間も經過しました後に材木屋の若い者が小供の下駄を片方持ちてこれは御宅の御兒のではないかと尋ねて呉れました、見れば正しく我が兒が先き方まで庭で遊ぶとき履いて居た下駄に相違ありません。若者は此處より半町ほど隔りし裏の堀の出口の處に流れて居たとの事でした、扨ては裏の堀へ落ちしに相違なしとて、裏の堀を捜索する事となり、堀

の持主にも相談して材木の下へ棒を差し入れて見る事となりました。三四人鳶口の付いたる竹棒を以て水の中を探りました處が、容易に小兒の死體が懸つて來ました。小兒の死體は裏の空地に沿ふた材木の下に有つたのです。

滿潮の時に岸とすれ〳〵になつて居た材木の上へ小兒は上つて行つたのです。無心に或る材木の上へ上つた時にその材木が不安定でクルリと廻轉しましたものですから、小兒は音をも立てずに隣りの材木の下へ潛り込んで終つたものと解釋せられたのです。漸く干て行く水と共に下駄の一つが流れ出て若い者の眼に止つたものらしいと、それもその時に集つた人の解釋でした。檢屍も濟みて水膨れとなりし我が兒を我が家へ引き取つたときの夫婦の悲嘆は何共申せねほどでした。

食事時でさへなかつたならば堀へ一人や二人の人の眼は離れなかつたでせうし、宜し落ちても直に引き上げられて死するまでには至らなかつたとも考へられ

ますが、何れにせよ今更取り返しのつかぬ事となつて終つたのです。

若き夫婦は閑寂を喜んで引移つて來たのでしたが、これに懲りて遠からず移轉して終いました。

小兒は水を好むものですし、水を恐れぬものです。怪し氣な足元をしながらに絶壁の縁に立つ事も左程に驚きません。河川多き町に住む人は決して愛兒を眼界より離してはならぬ事です。

疾病と迷信

迷信の弊害に就て

世間を支配する力の大部分は迷信ですし、美風佳俗と申すものゝ大方は迷信から出て居りますのですから、一概に迷信だ愚俗だと現社會の多くの事象を排して一から十まで道理づめにも出來ますまいが、さりとて現今の社會は餘りに多く迷信が巾をきかせ過ぎて居ります。

一から十まで道理に合ふ樣な事ばかりに社會の總ての事をいたして終ふと云ふことは出來ぬにしても漸次それに近いて行きたいと云ふのが吾れ等の生存の目的なのですから、出來るだけ愚劣な迷信に迷はされたり又之れを人へ推賞する樣な事は決していたしてはなりません。かゝる行爲は嚴密に申せば社會の目的に反した最大の

罪惡とも申さねばならぬ事なのです。

然るに現在の社會を見ますのに愚にも付かぬ迷信が中々に侮りがたき勢力を持つて居りまして、殊に疾病に關する迷信は尤も根强く人を支配してこれがために、多數の病者が苦しめられたり、死を早めたりいたして居ります例は、毎常醫師の經驗いたして居ることですし、醫師も折角に現代の進歩せる醫術を盡して加療してる最中に、忽然と此の迷信のために一溜りもなく總てを破壞されて終ふて亞然たる事に常住出合ふて居るのです。かく迷信の力に科學の權威が苦もなく破壞されて終いますのに出合いますたびに、吾れ等は迷信の力の偉大なのに驚嘆すると同時に、せめて疾病に關する愚劣なる迷信だけでも是非とも現社會から去らしめねばならぬと切に感ずるのです。

かく疾病に關する迷信力の旺盛なのには、現代の上流社會や智識階級の人々の不用意も大に關係して居るのです。一世に範たるべき家庭へ怪し氣なる行者風情を

平氣で出入させたり、出入させるばかりでなく大に彼れ等の提灯持ちをしたりして居ります。又は愚にも附かぬ事に樣々と勝手な理屈を附けた所謂心理療法なるものの信者となつて、彼れ等山師の看板となつたりして居ります。

又迷信を醒して眞の光の道へ指導して行くべき筈の僧侶が內職にお水だとか萬能藥を賣つたり、一生の運命はその行動する方角によつて支配されるものだとて、堂々帝都の中央で電話まで備へて置いて、暗劍が南で本命が北だのと勝手至極な妄言に高い見料を受けたりしてます。これが墨の衣を着て佛弟子だと云ふ樣な顏をしてる仕末ですから呆れて何とも申し樣もない位です。

迷信も社會に必要なものだと云ふ論も或る程度までは現代に於ては眞理かも知れませんが、弊害は到底弊害なのですから、弊害の歷然たるものは是非とも改めねばなりません。殊に逐次申し上げませうが疾病に關する迷信にして甚大なる害を病人へ與ふるものが極めて多いのです。

一般に疾病に關する迷信を二通りに分つことが出來ます。即ち一つは豫防的の意味に、一つは治癒上に應用せらるゝ場合との二つです。豫防的の意味のものは比較的に害が少いのです。例へば大工の用ゆる墨糸を首に卷いておくと惡しき咳をせぬとか、成田樣の御符を小兒の腰へ付けておくと外傷をせぬ、何々寺の御札を頂いて置くと小兒が蟲を起さぬとか云ふ樣な意味にて樣々な迷信が行はれておるのですが此れ等は豫防的の意味に用ゐられてゐるもので小兒の身體に直接の害を來すことが少いものです。然るに治癒上に行はるゝ迷信が色々とあります。例へば現在發病して呻吟してる兒を顏前に見ながら方角を吟味して醫師の撰擇に時日を經過させたり又は肺炎にて氣息も絕え〳〵なる兒の枕頭へ行者を呼び、座敷を閉ちて護摩に線香に病室を烟だらけにして、其上醫藥を廢してお水だとか、御符を飲ませるなぞ云ふ驚嘆すべき事實さへ常に行はれて居ります。かくの如き例は其外數ふるに暇なきほどにありますが、何れも治癒上の意味に於て用ゐらるゝ迷信は深甚なる弊害を伴ふ

ものですから、二三その弊に就て御咄し申上げませう。

方角の話

一　方角とは何ぞや

大昔の人々が極めて安閑として、人工の更に加へられてありませぬ自然界の内で生活して居りました時分は、一般の人々が自然界に親しく接して居りますだけ、又充分に自然界の諸現象に就て常に注意を拂つて居たのに相違ありません。されば太古に於て天文學が比較的に早く深く發達して居たと云ふのも、彼れ等はイルミネーションやアーク燈に眼を奪はるゝことなしに充分に星の運行を詠めて居ることが出來た爲めなのです。生れたるまゝの姿で加工せられぬ自然界に座して驚異の眼で四方を見廻して居た彼れ等が、晝の世界で太陽を最偉なるものと信じ、夜の世界で遠き星より幾千百倍も少なるあの月を最大なるものと信じたのも無理はありません

定期的に回轉し來りて吾れ等の眼界へ入る彗星の出現に驚倒して、凶事の倒來を神から暗示されたのではあるまいかと振え上つたのも無理ではなく、夜の幕の引去られて鱗雲に五彩の光の輝くのを見たとき東を希望の世界とも信じ、日西山に陰れて刻々に暗黑の影の廣く濃くなり增つてゆくとき、夕燒の空を指して衰亡の國は彼方と叫んだでせう。暖かき光の流れ來る南方には慈愛深き神が住ね、寒風を送り來る暗き北の空には凶殺の氣滿ちて魔神の世界が有らうと信じたでせう。方角の吉凶と云ふことも要するにかゝる原始的の人情から出發して來て居るのです。されば家を建つるにも希望と光明とを齎す東南を開いて、凶殺と衰亡とを暗示する西北を閉ずるを良しとしたのでせう。丑寅の方角を鬼門と呼び未申の方角を病門と稱するのも同じ考へから來たのに相違ありません。易に天象を垂れて吉凶を見はすと云ふ言葉がありますが、原始の民はかくの如くに自然の現象に觸れて感じたる己れの心情を神が彼れ等に示して與れたものゝ樣に感じたのです。

既に天の四方に夫々異りたる神の存在を信じた彼れ等が、洪水、疫病、地震等の天災地變を神怒によつて發したものとし、四方に祭壇を設けて神に謝したと云ふことも尤ものことです。漸次に彼れ等は居宅の建築に際して方角を論じてるばかりでなく、一切の行動も適當なる方角を定めて行はざれば神の怒を買ふであらうと考へるに到つたのです。神武大帝が東國の夷を御征伐になるとき皇兄が戰死されて且つ戰利あらぬを、之れは東へ向つて戰ふゆゑである、日輪へ對して弓を引くゆゑであると迂回して東より西へ夷を襲はれ始めて大勝を得られたと云ふ古話があります如くに、原始の民にありては何れも以上の意味に於て方角を重んじたのです。現今方鑒鑑定なぞと稱して暗劍殺が丑寅で、五黃殺が未申だ。彼方は本年は巽の方へ向つて事業を起せば成就するとか、醫者は乾の方から求めよなぞと云ふ樣な事を申すのは、これは支那から傳はつて來たのです。支那は文字が古くから出來ましたゆゑと大陸の事として天空の觀望が自在であつたためとで天文學が早くから發達して居りま

した。然しその天文學も前に申しました樣な原始的宗教的意味に於て發達して來ましたもので、彼れ等は前述の如く總ての社會の事象は神慮によつて左右されて居るものである吾れ等が幸福に安寧に生活せんがためには常に神慮に逆らはぬ樣にせねばならぬ、神慮に逆らはぬためには常に神慮の向ふところを知得して置く必要があると考へたのです。神は天に宿して居るのである、神慮の存するところを知らんとせば天を凝視してその暗示を受ける必要があるとて、國に役人を定め天文臺を設けて晝夜の別なく天を凝視させて居たのです。彗星が北の方に表はれたは國が滅亡する徵であるとか、流星南へ流れしは疫病國に流行するを表はしたのであるとか、役目とは申せ天文臺へ上げられて深更まで天を睨んで居る役人は、暇に任かせて色々の寢言を吐きます。寢言でも妄言でも役人の言を信じてる民共は大騷をして直にその方角の神を祭つて、神慮を安んぜんことを禱りました。かくして人事と星の世界とを密接に關係させて來たのです。

何年には何の星が天中に有つた、この年に生れたものゝ守護神はその星に宿つて居るのである。故にその人の一生はその星の運行と共に行動せねばならぬと、又別の閑人が云いだしたのです。既に星の運行に就て奇異の眼を放ち、無數の星に各々異る神の存在を認識してた太古の民は、この閑人の贅言を苦もなく信じたのは無理もない事です。方角の迷信と云ふのはかゝる順序で發達して來たのです。

我が國太古の民の間に於ても多少とも方角に就ては同じ様な原始的發達を追ふて居たのに相違ありません、四方拜なぞと云ふ御儀式が殘つて居りますのを見ましても純なる太古の民俗の何處も同じ様な順序で發達してたと云ふことが考へられませう。幸に我が國の太古が支那の如く文字の國でなかつたために深く邪道へ入らずに濟んだのでしたが、支那と交通しその文字が輸入されてから、安部の某とか云ふ様な天文家が天を咏めて神慮を民へ傳へるなぞと云ふことが流行しました。然し一般の人々が現今の様に方角に就て兎角云ふ程なことは無かつたのです。近代に至り

て松浦某なる人が支那の古書を渉獵して方鑒云々の事を云いだしたのです。それを更に尾島某なる坊さんが傳承して、更に新説を加へなぞして大に弘めたのです。彼れ等に申させますとこの原始的迷信が人生一切の安寧幸福を支配するものゝ如くに旅行、移轉開業建築等は一切吉方に向ふてせよと云ふのです。その吉方と云ふは生氣、毗和、退氣と云ふ三方でこの三方には自分の星と相生の星が座するゆゑ、萬事が圓滿にゆくと云ふのです。然もその自分の星と云ふのは生れた年によりて一定したる星があるのだと申すのです。これは前に申しました太古の民の考へをその儘に繼承してるのです。又彼れ等は凶方を殺氣、死氣なぞと申し、この方面へは己れの星と性の合はぬ星が居るゆゑに、此の方面へ向ふて事をなせば災害を叢生して如何なる吉神來るも之れを壓服することが出來ぬのだと申して居ります。變轉極りなき人生に於て時に盤根錯節に逢着すると云ふことは、寧ろ或る意味に於ては生き甲斐のあることなのです。日々に刻々に萬生れ千死してゆく人類界に於てその人類の一

舉一動が、その爲れたる方角に從つて禍福が分れると云ふが如き事のあり得べきものではありません。かゝる事を口に上すは世間を通り越したる御隱居さん達が、自個の狹き世界の内で逢着した幾十かの事故に強いて方角云々を附會し、誇張しての妄言に過ぎないのです。

彼れ等が唯一の賴りとする磁石の示す方角さへ、磁極の移動との關係上不斷に微動し移動してることも知られたる今日、東に向つて出發したる人が丸き地球を一周すれば西から歸り來ると云ふことは小學校の兒童でさへ知つて居る今日、地球の極に近づけば半年の間は太陽の沈まぬ晝が續き、半年間は太陽を見ることの出來ぬ夜が續く、其處にも人間が住うて居ると云ふことも兒童さへ辨へてる今日、巽が暗劍だの乾が本命だのと古代の支那人の妄言を受け賣りして、自ら貴き自己の行動を拘束してるが如きは、この兒童達の親としても恥ぢねばならぬことだと思はねばなりませぬ。

此の愚にも附かぬ方角調べは實に迷信中の尤も勢力ある、尤も弘通しやすいもの、一つでありまして、全國至るところでこの方角士なるものが大に巾をきかして居るのです。或る地方の醫師が話をいたしたことがあります、その醫師の住む大なる町の一隅に或る神社があるとのことです。處がこの神社の近方にて醫師を開業する人が何人ありても到底流行することが出來ないので何れも不思議として居たのであつた。段々と調べて見るにこの神社は此の町の鬼門除として建立したものであるゆゑその近方は町内の大部分より鬼門の方角に當るのであつた。鬼門は求醫に尤も厭ふがゆゑに、自然に診療を受くる患者も少いことが判明したと話されたことがありました。

この方鑒なるものが既に大なる眞理を土臺にして發達して來たものでありませぬゆゑ、夫々易者や巫女行者、賣僧の徒が勝手に自個の考へを加へて、出放題のことを申すのです。大道の易と撰ぶところがありません。故に甲に尋ね乙を訪ふに一々

返答が異りて、時に正反對のことを告げられると云ふ例なぞもあります。

又かゝる事を聞いたことがあります。或る醫師が或る町にて開業したのに思はしき發達をしなかつた。或る時その近傍に住む行者巫女の徒即ち方角士連を晩餐に招待して大に御馳走をしたところが、其後は俄に患者が增して來たと云ふ嘘の樣なはなしさへあるのです。

彼れ等の所謂凶方に逆つて事業をなして成功したる例を彼れ等に示せば、彼れ等は人の力盛んなるときは方に勝つものだと申します。同じ年月に生れた幾千の同期兵が同じ舟にて同じ方面へ出征し、一つは戰死し一つは凱旋するのは如何なる理由かと問へば、彼れ等の生れた日生れた時秒に差ありて、その差が星にも變化を來すのだと云ふ逃辭が設けられてあります。又當人の星には極上吉にても家族に凶の星あれば不幸を來すこともありなぞ、遂に追究してゆくと掴みどころのないものとなつて終ふのです。

實に方角の眞相はかゝる怪しいものなのでず、迷信も程にせねばなりません。凝つては思案に能はず、殊には若き父たり母たる人々は斷じてかゝる愚昧の說に耳を藉してはなりませぬ。

二　方角の弊

既に方角と云ふものかかくの如き愚にも附かぬ迷信でありますが、これを信じて居ります人々がこれに支配せられて居ります力は實に深甚なものです。殊に病人に關しての方角問題は常住人々が耳にして居ることです。病氣と云ふ異變が多少とも人の心を狂はせて居りますところへ、此の迷信が附隨して來るのですから、滑稽に感ぜらるゝ程度まで左右せられて居ります。

彼等はその醫師の專門如何を論ずる以前に、先づその醫師の方角を云々してるのです。醫師が專心に加療しつゝあるとき忽然とその醫師の方角の思はしからぬを云

々して、弊履を捨つるが如くにその醫師を謝絶して、從來の病症の經過に就て何等知得するところなき、又從來如何なる藥劑が與へられてあつたかに就ても何等知るところなき他の醫師を招聘し來りて加療せしめんとするのです。

現今の進歩せる醫術は極めて猛烈なる毒藥を病人に調合して與へて居るのです。されば幾日間持續して與へたならばその藥を一時中止して中毒を起すのを防がねばならぬと云ふ樣な例は珍らしくないのです。かゝる場合に前醫師が何藥を與へて居たかを知らずに投藥を請はるゝ新醫師は甚だ當惑するものなのです。さればかゝる場合に充分留意して與へたる藥が中毒症狀を現はして來るなど云ふことが有つたりするのです。又病症の經過を充分に知らぬ醫師が不意に病氣の途中で、單に素人の談話のみにて診定を下さんとせば自然無理も出來るし、又前醫師が初期に繰返したると同じ手數を用ゐて診斷を確定するまでに一兩日を經過して終ふと云ふ樣な不都合なことも出來て終ふのです。

新たに招聘せられたる醫師が從來の病歴や投藥の性質等を知得したしと、前醫師の立會を請求せんとする場合にも、彼れ等の多くは方角を云々して加療中を突然に謝絶したのを前醫師が好意に解して居て呉れるとは考へて居ません。されば出來る丈け謝絶したる後に呼びたくないし、その醫師の顔を見るのも心苦しい、又方角惡しと知つたる醫師との連絡は出來ることならば斷然と斷りたしと考へても居ります し、かゝる場合多くは前醫師との立會なしに加療を請はるゝ場合か多いのです。されば方角よしと喜び迎へたる醫師の加療によりて、却て病症が增惡したり、加療の適當なる時期を失して終ふ場合が有つたりします。

長い病氣で思ふ樣に顯も見えず、漸くその醫師にも厭きて醫師を轉じたしとて方角を云々しだす例が多いのがずが、又病人の出來る度毎に先づ方角を定めてから醫師を求めると云ふ飛んでもないのがあります。之れがために多くの時間を費して病症を增惡させて終つたと云ふが如き例もあります。

東京の山の手の或る寺院で盛んに方鑑鑑定で繁昌してるところがあります。この寺院では隔日に方角を見て呉れるのです。或る家で小兒が猛烈に發熱したのです。手觸りでも四十度以上と考へられる、兩親は非常に驚いてこれは容易な病氣では無いらしい、充分な醫師を求めて加療せしむる必要があると考へたのです。處でこの主人と云ふのが大の方角狂なのです。萬事を方角で決して行動ずると云ふ人で且つ上述の寺院の信者なのです。翌朝早速に駈け付けたしと思つたが相憎とその日は寺院の方で休みだつたのです。止むなく今一日は賣藥に氷嚢で待つこととし、翌朝早くに調べて來ることゝ定め、心配ながら小兒の枕頭に附きさうて一日を千秋と待つて居たのです。ブル〳〵と慄えたり急に飛び上つて泣き叫んだり、小兒は一通りならぬ苦しみです。マー待てよ明朝は早く醫師にかけてやるぞと切角氷嚢を載せてやつたりいたしましたが、小兒は遂にその夜更けてから痙攣して終いました。かくては主人も方角を論じてる餘地がなくなり、夜中ながら直に

近所の醫師を招聘して來ました。醫師は腸に汚物が蓄積したるがために發熱し、引いては痙攣たので、直に洗腸をする必要があると自宅より洗腸器を取り寄せ湯を沸かさせて充分に腸を洗つて終いました。かくて痙攣も發熱も多少輕くなりましたが、未た小兒の意識は判然とは致しません。醫師が投藥して歸りました頃は漸く東が白んで來た頃でありまして、電車の響が聞えましたのを待ち兼ねて主人は家を飛び出して終いました。例の寺へ行き、今の間に合せの醫師でなく、本當に主治醫を定めたくそれを聞きに出かけたのです。

主人が寺から息せき切つて歸つて來たのは九時少し過ぎの頃でした。手には方角を書いた紙を以つて顏色を換へて內へ飛び込んだのです。この寺の鑑定では今の醫師の方角は極めて凶方にて、是非とも此の醫師より遙かに東へ寄りし方より醫を求めねばならぬと云ふのでした。東へ寄つた方の醫師ならば誰にせんか彼れにせんかと思ひ惱みつゝ內へ歸つて來たのでしたが、飛び込んで見た內の樣子の

意外なのに主人は呆れ返つて終いました。愈々益々昏冥に沈みて高熱に呻吟しつゝあるべしと考へられて居た我が兒が床上に坐して母へ駄々をこねて居たので す。發熱も既に大部分は去りて平熱に近く、顏貌に多少の衰弱は現はれて居りますが、昨夜までの病症とは全く別人の如き觀を呈して居りました。流石に主人も今更に自分の狼狽かたに苦笑したのでした。かくて小兒は翌日は既に病床に居ることを厭ふほど元氣を恢復して終いました。

方角の決定するまで醫師を求むるのを待つて居ると云ふ此主人の如き愚さは、方角信者には決して珍らしいことではないのです。幸に此の小兒の如きは單純なる腹こわしであつたために、かく多くの時間を經過したに拘らず治癒いたしましたがこれが性質のあしき腹こわしや又は他の病氣にもせよ、小兒の病氣には殊に加療の時期を適當に發見するとせぬとが、その豫後に對して重大なる意義ある場合の多いものですから、多少性質のあしきものであつたならば、かく幸福なる結果を得ることは出來なかつたかも知れません。

又或るときかくの如き例を實見したことがありました。極めて繁忙な商賣の家で五才になる女の兒が熱病になつたのです。一兩日加療して見たが熱も下らぬし症狀が傳染性の熱病らしい、人手の少い家ではありまするし、早速に入院加療する樣に進めたのです。處がこの主人公も未だ若い人であるが夫婦とも大の方角信者なのです。早速に自分の信じてる方角見へ尋ねに行つた處が未申か若しくは辰巳の方角へ入院せよと云ふのです。色々と磁石を以て調べた處が辰巳の方角に良き病院がありますので、此處へ入院させることゝなり、翌朝車で病人を連れて行つたのです。醫員が診察の上入院する方が至當なるべく、病室はかく〳〵の部屋が恰度空いてるゆゑ、早速に入院いたさすべしとて、萬事準備も出來てその病室へ搬入したのです。その時一人の男が自轉車で驅けつけて來ました。これはこの主人の弟で某區で同じ樣な商業をして居る人ですが、又同じく大の方角信者で

兄の兒が今日某々病院へ入院すると云ふことを聞き、自分も淺草の某行者へ方角を尋ねに行きました。その病院の方角はその病人には大凶にして、其處へ入院するときは到底生還の望なしと斷せられ、青くなつて自轉車で走り附いて來たのです。それは大變と在つて切角に萬端の準備まで出來上つた病院から一度自宅へ連れ歸り、更めて方角を定めて入院させやうと云ふことゝなりました。病院を斷り高熱の病兒は又もや長い時間車上に搖られつゝ歸宅して來ました。自宅にて弟等と額を集めて相談してる處へ、その弟の家内が走つて來ました。この家内も連れ添ふ亭主に負けぬ方角信者ですが、彼れは彼れの信じてる行者を尋ねて鑑定を請ふた處が、その行者が申すのにこの病氣は下腹部より起つて居るのである。熱が多少差し引きある筈である、頭が痛いと申す筈であるが頭の病氣ではない、主としては虫の爲であるから御當所の虫封ずの禁厭を行ひ、明日午後三時まで全然醫藥を斷て、然らば必ず平癒せしめてやらんと云ふのです。されば兎も角この行者

の申すが如く行うて見た後、かくても熱も去らぬとならば入院せしめても遲からざるべしと此の妻君は熱心に論じ立てたのです。藥を全然與へぬと云ふことは出來ぬと病兒の母が反對をしました。然し此の妻君が申すのに行者に聞くに、若し醫藥を與ふるならば、治癒せしむることは出來ぬし、今までもかゝる例は多く、某々が死去したのも何時間醫藥を斷ちて、專念に神の救を待つ樣に申渡したのに依然醫藥を服したゆゑである、かゝる例を多く聞いて來たゆゑ、僅かに明日の午後三時までとある、必ず著顯が出ませうから、先づ欺かれたと思ふて醫藥を止め虫封じをして經過を見て居れと極力說くのです。

此の虫封じの方と云ふのは臍へ墨をぬり、御符を下腹部へ當てゝ寢せて置くと云ふ方法なのです。かくの如き重病のもゝをかくの如き簡單なる手當だけをして見て居ると云ふことは到底出來ぬと母親は泣聲を出して反對するので、此の妻君の建議は遂に入れられませんでした。妻君はそんなら死んでも知りませんと云つ

た氣な顔付をして歸つて終いました。

其處で更に入院案が討論に附せらるゝことゝなつたのですが、兄弟の二通りの方角調べに於て一致するのは未申の方角だけです。處が未申の方角には適當なる病院がない。唯一つ產婦人科の病院があるだけです。これには困却したがさりとて間狹にして人手少き我が家にて治癒してると云ふことは到底不可能である。專門は少し違ふ樣だが院長へ相談をして見んと、此の產婦人科病院を尋ね、院長に事條を具陳して願つた處が幸に許可になつた。然し醫師は專門の人が毎日外より來診することゝ云ふ院長の申出を此方は承知しての上でした。かくて疲勞した病兒は翌日の午後にこの未申の產婦人科病院へ入院いたしました。

その後この病兒は如何なる經過をとりしかに就ては聞くところがありませんでしたが、幸に治癒したにもせよ、隨分と馬鹿氣切つたる落語めいた話です。然も之れが東京の眞中で常々行はれて居ることだと聞いては呆れざるを得ぬではありませぬ

か。

三　日選びも同じ弊

何事をするにも今日は何の日だから吉だの凶だのと一々日を撰んで事をする人があります。この迷信も相當に流行して居りますと見え、新聞なぞもその日〳〵の吉凶を書いて置かぬと賣れが惡いと申す位です。然し復雜なる社會の事態に對し、その無數の人を數種に色分けしてその日〳〵の吉凶を論ずるが如きは何等の意味もなして居ぬのは論なきことです。

八十八夜には何の種を蒔くとか、二百十日は厄日だなぞと申すとは農夫が人文の發達せぬ時代にありて、農事をなす目安として必要であつたことでせう。御孃さんが深窓にありて遊戯半分のお仕事に、今日は酉の日だから斷ちものは良いの惡しいのと申して居るなぞは、何れはお遊び半分なのでせうから寧ろ結構な事でせう。今

日は友引だから葬式は明日へ延ばさにやならぬと論ずるのも賑かしに出て來てる葬儀員の申分として採用してやつても差支へないでせう。だが病氣はその樣な呑氣なことを申してぐず〳〵して居るべきものではないのです。病症によりては片時を爭うものだと申すことは度々繰返して申してることです。殊には小兒疾患の加療時期の極めて大切なものに對しては、この日撰びの弊害の深甚なのを常に吾れ等は實見してるのです。

今日は丑の日だから醫師にかゝるのは良しくない。丑の日に醫師にかゝると病氣が長引くと申すのです。何故丑の日は長引くかと申すのに別に論もない。丑の性質がだら〳〵して丑の小便と云ふやうに病氣までものそ〳〵だら〳〵されては大變だと申すのです。又申の日ですから今日入院するのは面白くありませんと、大事な重い病人の入院を一日延したりいたします。申は去るに通ずるから良しくないと云ふのです。既に病氣と云ふ大變を控えての話ですから、多少理智が暗んで居るのも無

理とは申しませんが、以上の樣な落し話の樣な事に左右せらるゝと云ふのは餘りに暗くなり過ぎます。

又今日は藥師樣の日で十二日だから良しくない。今日は一日で一日から醫師にかゝるなぞは縁起でもないなぞと申す人もあります。この人々の事を一々採用して居たら醫師にかゝる日もありません。病氣と云ふ突發的の事件に對しては、日撰びなぞはせぬものだと云ふ考へを一般の人々が持つ樣に致したいものです。殊に兒を持つ親達は是非ともかくありたいものです。

日撰びに一日を賣藥にて過して居たがために、小兒の病症を回復し得ぬまでに增惡せしめて終つたと云ふが如き例は多くの醫師の經驗してることです。同じ樣なことを繰返し申す樣ですが、決してかゝる愚は眞似られぬ樣に御願申します。

腎臟病の兒に燒酎を飲ませる親

或る山の手の大通りの大店の奥座敷で行はれた事です。夫婦に母堂に男の兒が二人、兒の兒は八才で今年から學校へ行つたとゆふ、弟の兒は五才の目鼻立の凉しい利發氣な可愛い盛りの兒です。此の弟の兒が一週間ほど以前より、急性腎臓炎にて發熱、苦悶も甚だしく腹は大鼓の樣に張れ上りて手足は元より、顏面も一面に水氣が來て眼瞼も閉ぢ塞がりて、一見重大なる樣子だと云ふ事は誰が眼にも著しく見えます。却て此の素人眼に極めて險惡に見えた事が、禍の種をなしたと云ふ事が後に至りて知られたのです。

家の内は大騒ぎです。常々來診を乞ふ主治醫も呼ばれ、その主治醫と談合の末に或る小兒專門醫を招き、その治療を依賴したのです。

その小兒科醫は毎日往診し、手當に就ても嚴重なる注意を與へ、尿水も毎日檢査し、注射、投藥に就ても全力を傾倒して加療を加へて居つたのです。素人眼では更に良好の徵も分りませぬが、醫師はその脈搏により、呼吸によりて漸次治療

の曙光を認めて、獨り會心の笑を浮べて居たのです。

此の兒の祖母が枕邊より去らず、寢食を忘れて看護に盡して居ります。元來本病はその飲食すべきものに就て、嚴重なる看視を要するものですから、醫師は祖母の看護に不安を感じて、看護婦を附すべき事に就て强請したのですが、自分は此の年に至るまでに幾人と云ふ病人を扱ふて居るのである、下手な看護婦よりも上手であると申して、祖母は看護婦を附する事に就て極力反對いたしました。

醫師も此祖母の熱心に强いてもと申せず、然らば病人の口中へ入れるものは、その水たると藥たるとを問はず、自分の許可なくしては何物も與へざる樣にと充分に申し傳へて置いたのです。

何故にかく嚴重に申し傳へたかと申しますに此の祖母は兼々非常なる迷信家であると申す事を傳聞して居たからです。一寸とした風邪にも、それ御水だ、御祈禱だと大騒ぎをすると云ふ事を聞いて居たからです。此の病症の漸く佳良なる

徴を示して居る際に、何物が混入せられてあるかも知得し得ぬ、所謂御水などを與へて、飲食物の撰定を治療の骨子として居るこの腎臓病に、如何なる變化を與ふるかも計られませぬゆゑに、かくは嚴しく申し渡して置いたとの事です。然し此の醫師の配慮も無効になりました。

追々に良好なる徴候の表はれて來ますのに元氣を得て、醫師は連日往診し熱心に診療を加へて居りました。然るに或る日の事です、例の如く午後の或る時刻に往診して見ましたところが、昨日に引きかへて心臓の工合も一般の症狀も極めて險惡なる狀態を呈して居りました。醫師の驚きは一通りでなかつた。次で枕元を見ますと何時もならば、その時刻には飲み盡されてあるべき水藥もその儘にされてあります。醫師は先づ早速主人を呼んで何故に服藥せしめざりしかを詰問いたしました處が、主人の申しますには誠に申し兼ねし儀ながら、祖母の申す事に逆ふのも如何かと存じ、その申すが儘に昨夜祈禱をする行者なるものを呼び、病災

平穏の禱をなさしめたりとの事でした。醫師の申しますに祈禱をなさるのは良しいとして、何故に服藥まで止めましたかと申しましたら、實はこれまた平素の御戒めに反きて申し譯なき事ながら、その行者が祈禱終りて後に申すには、此の病者は必ず治癒すべし、唯一日だけ醫師の藥に代ふるに我が命ずるものを與へよとの事でした。然してその行者の處方したものは何であるかと申しますに、鹽何匁に砂糖何匁を鍋に入れ、之れを燒酎と御水とを半々にしたるものを以て煮沸し、水飴の如くして病人に與ふべし、靈驗著しかるべしと申したとのことでした。醫師は驚いてそれを服せしめたのですかと反問いたしました處が、その主人赤面しながら實は祖母にも一應は貴殿に通じてその許可を得たる後にするが可ならんと申しましたが、頑として祖母が聞かず、止むなく一日間だけと云ふ事であつた故に、その爲すに任せておいたと申しました。

此の告白を聞いたときほど醫師としての侮辱を感じた事はないと、此の醫師は

嘆じました。かくて治癒の曙光も全然潰滅して終い、極力加療せしかども、漸々增惡して後數日を經ずして死去したとの事です。

治癒の曙光の多少とも現ぜんとしつゝありし小兒を、一朝にして總ての希望を破壞し盡して死滅せしめて終つたと云ふこの罪は誰れに歸せしむべきものでせうか。祖母にその死兒を懷かしめつゝ、その死因に就て充分會得する樣に說明し、祖母がそれを會得し得たとしたならばその祖母は何と申してその死兒に詫るでせう。病氣なるものゝ如何なるものなるかを解せざる、此の老母に如何なる達辯を以て說明したからとて、その死因が自個の迷信に因したのであると會得せしむる事は困難でせう。己れの過失に因りてその愛孫を他界せしめたとも知らず、葬式萬端を我れなくばと働いて居た事だらうと、その醫師も苦い顏しながら附言しました。

祖母は別問題としてもその若き主人は何故にその祖母の暴虐を爲すに任せて居

たのでせう。傳へ聞けば極めて孝心深き主人にて、老母に優しきを以て有名な人であつたとの事です。されど老母の言に逆はぬも程こそあれです。これも要するにその病氣に對しての充分なる智識が存在して居なかつたに起因して居る事と考へます。此の燒酎の煮つめものが腎臟に對して如何なる結果を齎すかを知つて居たならば、如何に老母の言に逆らはぬを以て能事と心得て居る主人でも極力反對したに相違ありません。元來かくの如き弊害多き行者なるものゝ存在を許してる社會の罪も深甚ですが、要は一般社會が病氣に對する智識が貧弱であるに因してると申さねばなりませぬ。

此に類したる事によりて愛兒をムザ〳〵と失ふた人の例は決して少くはないと信じます。

髮を剃る事

一　嬰兒の頭髮を剃る惡習

嬰兒の頭髮を剃る惡習は古くより存在するもので、その理由として傳へられつゝある口實にも幾通りも有ります。産毛をその儘に置けば逆上て病氣となるとか、産毛を剃つてやらねば濃き頭髮とならぬとか、産毛は不淨なものであるから剃らねばならぬとか甚だしいのになるとこの兒は呑龍樣の申し兒だと稱して少しでも長くなると剃つて終ふ親もあります。何れにせよ嬰兒の頭髮は一度は剃つてやるべきものと解して居る親が多數であると云ふ事は事實です。かゝる妄說は是非とも破壞して終はねばならぬ事です。何故に嬰兒の頭髮を剃る事が惡しき事であるかと云ふ事を次に御咄し申ませう。

二　頭髮は防禦器の一種なり

生れて日數の經ぬ內は、嬰兒の頭骨は軟骨の部分や、未だ接合せぬ塲所などありて、誠に軟弱なものなのです。故に出來る丈け充分に保護を與へぬと、一寸とした外力が加はりましても容易に變形したり、外傷をしたり致しますものです。されば自然に造物者は生れながらに産毛を與へて、その完成せざる頭骨の保護に任じてあるのです。

かゝる意味から致しましても産毛は決して剃るべきものではなく、寧ろ充分に長からんことを希はねばならぬものなのです。長ければ逆上するだらうとか云ふ說も大なる誤りで有つて、充分に厚かるべき骨が未だ接合もして居らぬ樣な頭ですからその代理に産毛があると思へば氣も濟む譯です。自然に健全に生れ來りし嬰兒を抱きつゝ所在なさに色々と母親や祖母さんが餘りに多く考へ過ぎる結果、或は逆上るだらうとか、或は逆上せた結果腦膜炎などになられて奪はれる樣な事があつては大事だとか、その儘に致して置いては親の義理が立たぬ樣に考へるがためなのです。

決してその儘にして於ても逆上せたりいたす心配は少しも有ません。現に考へても御覽なさい、逆上せてあしきものならば剃つた頭へ、更に厚き眞綿で包んだり致すではありませんか、軟かき産毛の方が厚き眞綿より何程か逆上せ方が少いかも考へて見れば、此處の理屈も要するに氣休めの理屈だと云ふ事が解りませう。

産毛を落してやらぬと良き頭髪が生ぜぬ樣に申すのも又大なる誤です、産毛と後に生ずる毛とは全然別のものでありまして、産毛を幾度剃りましたからとて、決して良い髪が生ずると限つたものではありません。後に生ずべき毛が發育して參りますと自然に古き産毛は脱けて行くものです、かゝる理由よりして徒に幾度も平氣で剃て居ります内に、後に御咄します樣な意外の病傷を惹起せしむる事があるものです。

産毛は不淨なものであるから、一度は剃り落してやれと云ふ事を聞く事がありますが、毎日産婆に浴せしめ石鹸で洗ふてやつて居るのに、特にその頭髪のみを不淨

と考ふる必要もない事です。呑龍樣とやらへ無病息災の願をかけた兒であるとて、少しでも伸びると目の敵にして剃り落して終ふが如きは言語同斷の事と申さねばなりませぬ。

三　殊に避けねばならぬは冬季の剃髪なり

前にも申しました樣に頭髪は外氣の溫度の直接に頭腦に影響するのを調節する効のあるものでして、夏は强き日光の直射を防ぎますし、冬は寒氣を幾分とも之れによつて防ぐ事の出來るものです。故に頭髪は是非とも一定度の長さを保たしめて置く必要のあるものです。夫れを殊に頭骨の未だ完成せぬ嬰兒の頭から、この防禦器たる頭髪を剃り落して終ふと云ふ事は亂暴至極と申さねばならぬのですが、特に戒めねばならぬ事は冬季嚴冬の折の剃髪です。

これは嬰兒に限らぬ事ですが、未だ二三才の小兒はこの冬季の剃髪や散髪に因り

て容易に風邪をひく事のあるものです。凍り付きそうなバリカンや剃刀が襟足や額へ當りました丈けでも、ヒヤッと寒氣を感じて皮膚に粟を生ずる事のあるは、吾等大人でも常々經驗してる事です。夫れを抵抗弱き嬰兒の頭を濕しておいた上で、冷かなる剃刀を以て撫で廻すのですから、剃つたる後に風に曝されて風邪をひくと云ふよりも、既にその剃髪中に風邪をひいて終ふのだと考へられる場合が多いのです。

小兒にありて風邪をひくと云ふ事は、大人が風邪をひいたと云ふ樣に多くの場合が簡單に濟まず、容易に病症も増惡いたします餘病も起り易いのです。されば戒めねばならぬのは殊に冬季の剃髪です。

灸と鍼

一　小兒には有害にして効なし

我が兒の身體が大事と思へばこそ、我界なき可愛ゆき兒の肌へ火を點じたり、針

をさしたりする事も出來るのでせうが、これが更に寸効なきものですから、迷信とは申せ、生れて間もなき兒に刺青をすると聞く南洋の土人にも比すべき野蠻慘酷なる行爲と申さねばなりません。

灸によりて蟲を押へるとか、癇を止めるのだと申して行ふ人がありますが、癇だとか虫だとか申す言葉が既に甚だ意味をなさぬ言葉でありますのに、その癇とか虫とかを治癒するのだと申す事も大に怪しいものだと知らねばなりません。決して灸にはかゝる治癒上の効果は更になく、却て元來虚弱なりし小兒を愈々神經質ならしめたり、かゝる事に時を費してる間に小兒の病氣を却て増惡せしめたりせぬとも限りません。灸を据えつゝある時に「ひきつけ」て終つたとか、灸をしたら發熱をしたとか申す例は數々耳にいたす事です。

二　鍼は殊に危險なり

鍼治の効は主として筋肉神經の末稍を刺戟しまして、血行をよくいたしたり、劇痛を緩和したりいたすのが重なるものなのです。又一方精神的に治療の効を奏すると云ふことがその大部分を占めてる事に相違ないのです。されば極めて巧妙なる技術によりて細さ長さ針を筋肉神經の間を縫ふ樣に挿入するのですが、兎も角かゝる異物を、殊に消毒の不完全なものを抵抗弱き小兒の未だ完成せざる臓器の間へ挿し入れると云ふ事は、如何に雄辯に辯解しても有効だと申す事は出來ません、殊に精神的には小兒に對して何の効もなきものです。且鍼治等が小兒に對して應用せらる多くの例は或る疾病に對しての治療上に用ゐらるゝよりも、何等かの恐るべき疾病の襲來を杞憂して豫防的に施さるゝ場合が多いのです。之れ等は殊に非常識極まる話でして金屬の針を以て筋肉神經を刺戟いたした丈けで、將來の疾病が豫防せられる筈の有るべき道理がありません。

三　効果を云々するよりも害を恐れよ

何處とかの小兒は灸を据えて以來、あの通りの健康になつたとか、彼處の兒は鍼をして以來顏色も非常に佳くなつたとか申して、我が兒にも灸をしたり鍼を施したりいたしますが、前にも申しました樣に灸や鍼は小兒に對しては治療上何等の効のなきものです。他家の兒が灸によつて健康が増したり、鍼によりて持病が治癒したと云ふ樣な事は、それは灸や鍼の効ではなく、他の何等かの原因によりて健康が増し持病が治癒したものに相違ありません。されば口傳のその樣な効能呼りを信用せずに、先づその害の恐るべきを信じて、如何に進むる人があつても嚴に避けねばなりません。

泣く兒に灸

左官の松さんは今年四十一です。働はないと云ふ評はあるが、正直で實着なので親方の受けも宜いのです。五つ年下の神さんとの間に當年五才の男の子が一人ある、名を芳雄と附て花とも蝶とも眼の中へ入れても痛くないほどに、父親の愛は世界の總ての幸福も享樂も一切この芳雄の一擧一動の上へ集めて終つて居るのです。疲れて歸宅したとき開ける格子の音につれて、走り出て來る芳ちやんの聲を聞くと、松さんの顏かサーと崩れて如何にも嬉しげな色が浮びます。ドカリと入口の土間に腰かけてゆふ〳〵足袋の埃を拂つて居るのは、疲れたばかりではない、何時もの樣に芳ちやんが首玉へ嚙付いて臭れるのを待つて居るのです。臺所に瞻ごしらへをしてる神さんと談話を交換しながら、芳ちやんに手を引ぱられて座敷へ上つて來ます。火鉢の前へ座つて着物も換へぬ內から芳ちやんと二人で開けて居るのは御辨當の箱です。中からは得意先の茶受けに出た蒸菓子だとか鹽せんべい、燒芋などが出ます。何が出て來るかを待つてる芳ちやんの顏は大眞面目

です。茶受けに出たのを食べずに辨當箱へ入れて來るには、仲間へも多少氣兼もして來ねばならぬのですが、芳ちやんの此の顏を思ひ出すと自分が喰へて終ふ氣にはなれず、何時も自分の分だけを貰つて辨當箱へ入れて來るのです。

この芳ちやんが半月ほどこの方何うも元氣がないのです。明けても暮れてもペツ〳〵と泣き顏をして居ます。松さんの心配は一通りではありません、唯さへ冴えぬ顏に益々陰鬱な影が增してゆき、芳さんの不機嫌な顏をながめては、血色の惡しき神さんと吐息をつき合つて居ます。

進むる人の有る儘に仕事を休んで濟生會へ連れてゆきましたところが、氣管支加答兒であるから溫かくしておけと云ふて藥を與れました。一日隔てゝ復行きました、同じ樣な病名で同じ樣を藥を受取つて來ました。然し芳ちやんの機嫌は少しも良くはなりません。折角松さんが菓子を持つて歸つて來ても、以前の樣に嬉し氣な顏もせず、何かと機會さへ有らばベツ〳〵と泣き出すのです。

隔日に診察やら藥取やらに四五回も濟生會へ通いましたが、更に効果が露ほども顯れません。

松さんが思ふのに之れは適切り疳が起つて居るのに相違ない、疳だとすれば幾程醫藥を與へたからとて治癒する事はない、別に治療の方法を講ぜねばならぬと考へたのです。仕事場で仲間の人々に相談して見た處が、それには尤も良い灸がある、淺草の某寺で下して呉れるゆゑ、連れてつて見よとの咄し、松さんは翌日仕事を休むで淺草まで灸點を下して貰いに行きました。脊骨に添うて頸部より何寸とか下つた處へ、一日に三點宛すえよと教へられて來ました。

その翌日毎日仕事より歸ると、神さんに押へさせておいては芳ちやんの脊中へ灸をすえるのです。熱いから御免なさいと云つて泣く芳ちやんよりも、モット熱い涙を松さん夫婦は眼に溜めながら、チーと燒けてゆく皮膚をハラ〳〵しながら見入つて居るのでした。

灸をすえる樣になつてから芳ちやんは松さんの見て居る前では泣かなくなりましたが、元氣は益々あしく食事は細るばかりでした。細つて來た食事も遂には受けつけなくなつて、一寸と白湯を一杯與へても直に吐き出して終ふ樣になつて來ました。身體は痩せ細るばかりです。

松さんも此の有樣を眺めつゝ、之れは疳ばかりでも無さそうだと云ふので、近所の小兒科の醫者を訪問する事としたのです。處が既に〳〵病症深く膏肓に入りて到底回春の望なしと診斷されて終いました。

親しき仲間の男に片棒荷うて貰うて、力なき足をトボ〳〵と泣き腫らした眼に有らぬ方を眺めつゝ、松さんが芳ちやんの死體を火葬場へ運んだのは、それから四五日後の事でした。

慰め方もないまでに氣拔けした松さん夫婦は、二月と經ぬ内に何方とも分らず引越して行いて終いました。

鍼療治をして我が兒を失ふた親

かゝる題のもとに私は鍼療治なるものを全然に有害なるものとして攻撃せんとするのではありません。鍼醫は古來の多くの經驗に加へて最新の醫學も加味せられて、その鍼を刺す塲所も一定せられて居りますゆゑに、私が茲に申し上げる樣な過失は極めて稀なる例に相違ない事と信じますが、既に鍼療治の効は神經痛、又は疝痛などにその末梢神經を刺戟して疼痛を減退せしめたり、若しくはそれによりて精神的に苦痛を消退せしめたりする効があるものなのです。此の理を充分に會得せずして何處其處の鍼は腦病に卓効があるとか、誰さんの鍼は子宮病に妙に効とか云ふ人の口の端を信じて、取り返しのつかぬ失策をして終ふのです。殊に精神的療法の更に効果なき乳兒などに、かゝる事を用ゐましたからとて何の効果がありませう。既にかゝる乳兒に鍼を用ゆる鍼醫自身にも許すべからざる罪は

ありますのですが、効のあるなしは別としても甚だしき害さへないとしたならば鍼醫の方は鍼を刺さねば商賣になりませぬもの、依頼を受けて刺して見ませうと鍼を持つのも不思議はないのです。要はかゝる事を依頼に行く母親の罪です。

東京の市街つゞきの繁華なる新開地に荒物屋をして居る夫婦者がありました。主人は電車の方へ勤めて居ますと云ふ人で、極めて靜かな穩かな人です。夫婦になりて約七年經過し、小兒は二人出來ましたが、先の兒は腦膜炎で死去いたしたとの事でした。今年二才の兒を抱えましても、先の兒が突然に腦膜炎で奪はれましたのに、怯氣が立ちまして一寸とした鼻風邪にも、大きな聲して泣ましても、これが腦膜炎に變じはせぬかと心を安めた間もないとの事でした。虫封じの御札が出ると云ふので、主人は休日の日に數里もある寺へ參つたりいたした事もあります。又或る易者は小兒の潜める病氣を非常に良く發見すると聞いて出かけました事もあります。然るにその易者は此の兒には腦の氣があると申したとの事です。

腦の氣とは何だか判然いたしませぬが腦膜炎の前徵があるのだらうと兩親は愈々苦勞を增したのです。かゝる內に誕生も無事に濟みまして、既に滿一年と五ケ月ともなりました。片語の一つも申し、クル〳〵と肥えたる色白の愛らしき顏は何の病氣も潜んで居さうにも見えなかつたのですが、兩親はその愛らしき笑顏の裏に腦を犯す恐ろしき虫が潜伏して居る樣に、不斷に恐れを抱いて、今日はその恐るべき虫が荒れ出すか、翌日は息の根が止る樣な事が出來はせぬかと、不相變不安なる月日を過して居りました。されば幾度も幾人もの醫者へその無病の愛兒を抱いて行つたものです。

然るに或る日の事です、店へ買物に來た近隣の人の話に、目黑の近くの某と云ふ鍼醫は腦病に非常に効く針を刺すとの噂、此方の御兒も腦の氣があるとの事ゆゑ、一度連れて行かれては如何にや、所はかく〳〵の處なりとの話でした。腦に効能あるものと聞けば、聞き洩しの出來ぬ內儀は主人の歸宅を待つて早速に話を

いたしました處が、然らば此の次の休日に自分が留守して居るゆゑ、一度連れて行くが良かるべしとの事。次の休日を待ち兼ねて、幸の暖かき日を山の手電車にて目黑の鍼醫の處へ連れて行きました。その鍼醫と申すは既に五十も越した位の盲人ですが、餘程に技術の勝れたものか、多くの人が治療を受けに來て居ました。漸く自分の番が來ましたので、小兒を抱きて內儀が恐る〳〵鍼醫の前へ進み、先づ此兒の兄の死に就て語り又此の兒は或る易者の言に依れば腦の氣があるとの事何とぞ腦の氣の出ぬ樣鍼療治を御賴み申すと申しました。鍼醫は小兒を膝にのせて、脊筋、頸筋などを撫でゝ居りましたが、如何にも此の兒には多少腦の氣がある、二本の針を刺せば大方は根治し得べしと申します。何分よろしく依賴いたしました處、その鍼醫は針を頸部に近くと、脊椎に沿ふて背中に一本を刺しました小兒はその時聲を限りに泣いたと申す事です。治療代を支拂つて歸途に就きましたが、小兒の啼泣は何分にも止みません。引返して尋ねて見んかとも思ひました

が、多少痛いのも鍼の効果があつたのであらうと定めつゝ家へ歸へりました。家へ就きました時分には、泣聲は多少減じましたが、顔色は常ならず勝れません。主人に今日の次第をはなしつゝ、小兒を裸體にして針を刺した處を見ますのに、下の方のは何ともありませんが頸部に近き方は紫色をして少し腫れて居ります。小兒の樣子は段々とあしくなつて來ます。兩親の驚きは一通りではありません。如何なる理由によりてかゝる症狀を呈するに至りしかを、人を以て鍼醫に尋ねにやりますと同時に近隣より醫師を呼びて診斷を受けますと、その鍼醫の手落ちによりてかゝる症狀を呈するに至つたのであらうが、既に一般の症狀も極めて險惡であるゆゑに、兎も角急ぎ病院へ入院せしめよ、外科的加療も時に必要であるかも知れぬと申すので直に其病院へ入院せしめました。胸腔の方へ血管の大なるものが破れて出血いたしたのか、又は針の不潔より或る病毒に感染したのか、詳しき事は存じませんが遂に翌朝死去して終つたとの事です。

腦膜炎を未然に防がんとして、遂にかゝる過失に惹起して愛兒を他界せしめて終いました兩親の悲嘆は想像の外です。

今更に鍼醫を告訴してその罪を論じましたからとて、それが何で愛兒の供養となりませう。何れも此れは餘りに小兒の病氣に對して無智過ぎるが爲なのです。始めての愛兒を腦膜炎なる恐ろしき病氣の爲めに、奪ひ去られたる恐怖が深く深く頭の中へ滲み込んで居て、かゝる悲慘事を誘ふて來たのには相違ありますまい。

されど今の進歩せる醫學上より申しますと、兄が腦膜炎にて死去したゆゑに、弟も必ず腦膜炎にて死去すると云ふ事は想定せられて居ないのです。又俗に腦の氣のある兒だなどと、易者などが申す事がありましても、假に不幸にしてその易者の言が的中する事があるとしましても、それは遇然に的中いたしましたまでゝ今の尤も進歩したる醫學的診定法を用ゐましても、現に耳に疾患があるとか、鼻

や眼或は齒が惡いとか、肺、腸が惡いとか申す事のない限りは、健全にして機嫌よき兒に腦膜炎の潜んで居るか、居らぬなぞ申す事も到底推量する事さへ許されぬ事なのです。それは今日唯今、腦膜炎の症狀更になしと申しましたからとて、不幸にして其の夜より表はれて來るかも知れません。然しそれは自ら別の問題です。又現在の醫學では健全なる兒に腦膜炎を豫想して、之れに豫防の療法を施すべき何等の方法も存在しては居らないのです。之等の事を充分に會得して、我が兒の或る一人が腦膜炎にて奪はれたと云ふが如き人も、今申し上げた樣な失策を重ねぬ樣にせねばなりません。

兒童と賣藥

一　誇大されたる賣藥の價値

既に藥と云ふものに限らず、何れも賣ると云ふ目的上その効能が誇張されて廣告

されると云ふことは是非もない事です。俗に能書と云ふ言葉が藥の効能書ほど當てにならぬと云ふ意味に用ゐられて居ります樣に、古來尤も廣告に力を入れて居たものは藥屋です。唯今でも新たに或る種の藥を賣擴めんとするには。先づ廣告料の幾萬圓とかを費消せねば賣れぬと申されて居る位です。されば誰れしも只今では賣屋の能書を見た丈けでは、その藥の効能に就て信を置く人は少うムいますが、これがその賣藥の効能に就て或る知人の實驗談なぞを聞かされますと、然かく効果の著しきものならば我れも用ゐて見んと云ふ氣になるのです。かくて若し幸にして自分の病症が此の賣藥の使用によりて輕快した樣なことでもあると、この賣藥の効能を更に誇張して人に進めると云ふ樣なことゝなります。かくて逐次その効能が誇大に申傳へられて少からず人を誤る樣な事ともなるのです。

何々家家傳の練り藥は如何なる咳にも効果がありて、誰某の幾年とかの持病の咳がかの練り藥二貝を使用して治癒したとか、何町の豆腐屋で賣つて居る藥は何百年

とか前の先祖が何々大師とかより傳授されたる藥にて、小兒一切の熱病に効ありとか、又は何々寺より賣出す藥は小兒の疳に卓効ありて、内の兒の重さ疳が一兩日服用してる内に治癒したとか申し傳へ、聞き傳へて幾里の道も遠しとせずして買求めに行くのです。

同じ病名にても多くの變つたる症狀を現すのに、或る一種の藥が多くの變つたる病氣に對して同樣に靈妙に卓効あるものゝ樣に考へるのは餘りに非常識過ぎます。慢性病にて如何に現代の進歩せる醫術の最善を盡しても効なきものに對して、自分の氣休め、病人の慰みに無効にても同時に無害なる賣藥を與へておくと云ふことは一方精神的に多少の効果を擧げ得るかとも考へられますが、これを全然信用してこれに貴重なる身體を任せると云ふことは亂暴極る話だと申さねばなりません。

賣藥と申す内には今申し上げた樣な古き家傳藥ばかりでなく、又現在の所謂新らしき人に買はれる新らしき賣藥も色々とありまして、又これが盛んに賣られるので

す。新らしき人々はヘブリン、ビリンは解熱藥だと云ふことを知つて居ります故に、發熱でもいたしますと直にヘブリン何々とかビリン何々とか云ふ藥を買つて來て服用いたして居ります。

然し大人が自個の自覺症狀に訴へて感冒と判じて風邪藥を服用して居たとて大過はなしとしても、これを小兒の病患にまで應用すると云ふに至りては言語同斷と申さねばなりません。

藥と云ふものは體重に應じて分量を定て居るものです、大人を平均十五貫目として之に應じて大人の一日量を定めて居るのです、故に一貫目未滿の小兒に對しては大人量の十五分の一以下でなければならぬのですのに、自分が風邪を引いたときに飲むビリン何々の三分の一だとか又は四分の一だとかの分量を與へて居ります。不幸にしてそのビリン何々がビリンを大人一回量に適當した量を調劑してありましたら、小兒は直くに中毒を起して倒れて終ふでせう。

現にヘブリン何々で小兒が中毒を起したと云ふ例は、常に小兒科醫の實見してる事例なのです。

二　病氣を手遲れにさせる

新らしき藥を使用してある賣藥を用ゆると前申した樣な中毒の恐るべき失敗を來しますし、何々家傳なぞと申す藥にも毒にもならぬ樣なものを與へて居りますと、此度は更に恐るべき所謂手遲れと云ふものに致して終います。

小兒の身體が未熟な抵抗の弱いものですから、一寸とした病氣にても或る程度まで進行せしめて終いますと、手も附けられぬことゝなつて終ふものです、夕方まで遊んで居た兒が夕方から急に發熱して、明朝醫師を訪問せんとして居る內に息の根が止つたりして終ふことが決して珍らしいのではありません。殊に夏の病氣などには尤も多くかゝる例のありますもので、發熱した當初に醫師の加療を受けて、醫藥

の最善を盡して猶且つ恢復し難きことの有り勝ちですのに、數時間を放置してる內に病症がどし〳〵進行して終い、加療の道もなくなつて終います、これを發熱した樣だ何々丸でも與へて置けなぞと先づ賣藥にて經過を觀察して見やうと云ふのが一番の致し方ですが、殊に夏より秋へかけ疫痢なぞ云ふ猛烈なる疾病の流行する時期には嚴に戒しめねばならぬことです。

三　持藥を與へて病氣の製造

醫師が兒童の或る病氣を加療してるときに、これと云ふ原因の發見し難くして榮養はドシ〳〵惡くなり、下痢が何としても止まぬことなどがあります。その時詳しく調査すると母親が此の兒は毒の多い兒だからとて常に毒下しを持藥として朝夕與へて居たと云ふが如き例なぞもあります。

現在に於て何等の疾病もない兒に兩親の獨斷で此の兒は毒が多いとか虫が强い、

疳が高いなぞと申して、毒下し虫下し疳おさへなぞの賣藥を持藥として與へて居る人が往々あります。此の爲めに小兒が常に胃腸を害したり、腎臟病を起したりいたすことがあります。

毒が多いとか虫だ疳だと云ふのは多くは迷信から來るのですが、何れは我が兒大事に健かに生長せよとの願いからかくは持藥も與へるのでせうが、機嫌が惡しくて虫のせいだ、疳ではなからうかと徒に案じたり、毒が有る兒だと云ふ杞憂があるならば何故勝手に素人考へを以て藥なぞを與へて、醫者に相談なさらないのですか、病氣のときに勝手に藥を與へて手遲れにして終ふのと同樣に、病氣でもないのに持藥を連服せしめると云ふことも決して致してはならぬことです。それが如何に靈藥であらうとも決して迂濶に信じてはなりません。

災害のいろ〳〵

皮膚損傷と腎臟炎

兒童には急性腎臟炎が比較的に多いものです。これは多くは兒童は腫物が出來易く、又小外傷等の絶えぬものですから、その傷口や腫物を通じて或る種の黴菌が身體の內部へ浸入し、血液と混して體內を巡回して居ります內に、身體の下水口たる腎臟の細い血管に引かゝりて、此處で急性炎症を起し膿や血液を混じたる小水を出す樣になり、引いて全身に浮腫を來すことゝなるのです。

兒童に來る急性腎臟炎は加療よろしきを得れば比較的に治癒し易いものですが、それかと云ふて或る度を越しては時に生命を奪はれねばならぬ事なぞのあることも、決して珍らしいことではないのです。且つは長い間即ち小水へ蛋白の出て來る間はその飲食物に就て嚴重なる看視が必要でありますのと、何分相手が兒童のこ

とですから食物の制限と云ふことは容易ではなく、看護してる母親に血を吐く苦しみを與へたりいたします。

靴擦れから來た腎臓炎

俊雄君が此度一年級を優良なる成績で卒業した褒として、麻布の伯母さんから立派な靴を頂戴いたしました。欲しくて〳〵堪らなかつたもの丶一つが手に入つた俊雄君の喜は意想の外です。早速伯母さんの未だ歸らぬ内から履いて終つて座敷の中を飛んで歩いたり、椽側へ傷が付くと云ふて父上から叱られたりしました。

その夜の中に母さんに靴下を買つて頂いといて、翌朝は早速學校へ履いて行きました。小兒は直に大きくなるからと云ふので、伯母さんが氣をきかしたのでせうが俊雄さんには少し大き過ぎる靴でした、皆に冷かされながら嬉しそうな顏をして家を出た俊雄さんも編上げの結んだ緒から下で、靴と足とが別々になつて居る樣に感

じました。何の此位な事で僻易するものか、俊雄さんは早くお友達に見せひらかしたくて、飛ぶ樣に學校へ來ました。運動場では小鼻をピク付かせながら、これ見よとばかりに知らぬ他の級の生徒の前なぞを、わざと往き來したり、君！　之れは麻布の伯母さんが買つて呉れたのだよ、キットと云ふ靴だぜと問いもせぬ友達のたれかれに聞かせたりして居ました。學校からの歸りは眞直に内へ歸つて終ふのも損な樣な氣がして、大通りを迂回して來ました。然し餘りに今日は多く活動したがためか、我が家の近くへ來た時分に足の踵のところの痛むのを感じました。

靴をぬぎ捨て丶家へ上り、靴下を取つて痛む踵のところを見ましたら、少し赤く腫れて居ました。足の痛む談なぞをして、折角の喜びを消して終ふのが厭だから、皆には話さなかつたのです。

翌朝は少し赤くはなつて居たが、痛みは左程でもなかつた。俊チャンは又しても大元氣で靴を履いて出かけて行きました。然し今日は學校へ來た時分に既に踵が非

常に痛くて、休み時間にも昨日の樣に運動場を飛び廻ることなぞは出來ませんでした。體操の時間に驅け足をさせられるときは泣き出しそうな顏をして居ました。放校後は友達とも離れて足を引きづり〳〵歸つて來ました。伯母さんも痛くない靴を呉れゝば良いのにと、俊チャンも少々伯母さんが怨めしくなりました。

家で母さんに踵を見て頂いたら、大きな火腫れが出來て居て、その周圍が眞赤に腫れて居ます。針で火腫れを破り、石炭酸膏と云ふのを塗つて繃帶して頂きました、かくて折角の靴も二日より樂しめなかつたのです。又翌日からは下駄で學校へ通ふことゝなつたのです。

靴が戀しくて仕方がないのですが、足の傷が治りませぬため、未だ母さんから御許が出ません。毎日一回宛母さんが膏藥をかへて下さるのですが、中々治りません、押すとジク〳〵少し宛膿が出ます。

二三日したら胯の附け根へグリ〳〵が出來ました。眼の椽が少し腫れぼつたく、

この兒は肥えたのかしらんと母さんが不思議がつてる內に、段々顏面から全身へ、浮腫が進んで來ました。然し元氣は大しては變りもなく學校へ行くものですから左程とも思つて居りませぬ內に、下女が坊チャンの小便は血の樣ですと云ふのに驚いて見ますと、果して赤い美しい如何にも血の薄めた樣な小便です。これに驚いて早速俊チャンを醫師へ連れて行きました。

醫師の說明によるとこれは踵の傷口から病毒が侵入して急性の腎臟炎を起したのである。安靜に就褥せしめ食物はかく〳〵のもの以外を與ふべからずとて、かれこれ一ヶ月も就褥し服藥して、未だ少し顏色は勝れませんが、學校へ行きても差支へなしと醫師から申し渡されたのは、漸く二ヶ月も後の事でした。

伯母さんが折角に呉れた靴が以外の病氣を惹き起しましたが、これには伯母さんの靴にのみその責を歸する事は出來ません。靴によりて生じたる傷口の手當が良しくなかつたものですから、この病氣を起したのでありまして、その大部分の罪は母

さんにあるのです。

傷にかぎらず、小なる腫物にても長い間放つておきますと、時に隨分と猛烈なる腎臟炎を起すことのあるものです。

急に膨れ上つた豆腐屋の下女

柏木附近の豆腐屋の下女の話です。この下女は三月ほど以前千葉から出て來て、世話する人のあるまゝに、此處へ奉公いたしたのです。年は十四です。

豆腐屋と云ふ家業ほど骨の折れる商買は外にはあらざるべしと思はるゝほど、此の女にはこの商買が辛かつたのでした。朝は二時を打つたか打たぬ内から起されて火を起し湯を沸し、豆を煮で、これを臼にかけねばならぬのです。臼にかけたのを更に漉したり、型に入れたり、油揚をする、燒豆腐をつくる、朝何時かまで世間の人の漸く顏を洗いに起る時分までに、その人々の朝の御膳に間に合せねばならぬの

ですから、主人夫婦と下女との三人は眼の廻る位な働き方です。

豆腐屋の店と云ふものは土間になつて居るものです。汚れた草履を引かけて立働いてる下女の足は、土足と變りのない位に汚れて居ります。この足へ先月あたりから、蚊にさゝれたか蚤にくわれたか、少し腫れて痒くてしかたがない少なる腫物が二ッ三ッ出來て、下女は大弱りです。

横目もつかへぬいそがしさには、痒いからとて足をかいてる暇はありません。忙がしき朝の間は少しは忘れても居られますが、少し暇のある午後となると手は不斷に足の腫物を掻いて居るのです。掻くゆゑに破れて血が出ます。出た血が凝つたところを頻に掻き落して更に新らしき血を出したりして居ります。

夜中疲れて床に就いた後も、餘程痒いと見えて寢言を云いつゝ手は足の腫物を掻きこわして居るのです。かくて漸次に養成せられて行きました腫物は、段々とその數も增し、大きくもなり、始めは掻けば血より出なかつたものが、少しづゝは膿も

出る様になりました。かゝる中に下女の顔や足などが腫れて來たのです。始めは脚氣ではないかなぞと申して居りましたが、水氣はドシ〳〵と増して行くばかりです。

忙がしさと人手の少きとに出來るだけは辛抱させて居たのですが、餘りに腫れて來るゆゑに一先づ歸郷させねばなるまいと、郷里へ急ぎ紹介してやつたのです。

然るに郷里からの返事を待つ二三日の中に、下女は床へ就いて枕が上りませぬ。水氣はドシ〳〵と増加しゆきて、溜まれるところへ何處でも張り切れそうに膨れ上つて終いました。顔なぞは眼が細くかくれて何處にあるか分らぬ位になり、足でも手でも、胴でも平常の二倍以上にもなり、日向へ出したら透き通りはせぬかと思はれる位になりました。

醫師に見せれば一眼にて立派な急性腎臓炎と診斷されて終た位です。直に大學の内科病室へ入院いたしました。最善を盡して水氣を取る丈けに約一ヶ月位を要した

位でした。全治退院いたしますまでには四ヶ月餘を費しました。

何故にかくの如き猛烈なる腎臓炎を起して來たかと申しますに、腫物や傷口から黴菌が體内へ侵入すると云ふ事は有り勝ちな事です。されど身體自身には相當の殺菌力が存しますゆゑに、大方は大事に至らずに治癒せしめて終ふものです。只不斷に黴菌が侵入いたして來ましては、如何に張き力を持つて居りましても、遂にも打負されて終います。此の下女の如きも不潔なる足に出來た腫物を少しも早く治癒せしめんとはせずに、猶ほその上から汚れたる手や爪を以て絶えず、黴菌多き汚物を腫物の中へ押込む様にして居るのですもの、彼れ自身に如何に強き殺菌力がありましても到底禦ぎゝれるものではありません。

故に腫物は一寸としたのでも、長く治癒せぬものがあつたならば、必ず醫師の加療を受けて少しも早く治癒せしめて終ふ様にせねばなりません。

身體の劇動と腸重疊症

腸重疊症とは管になつて居ります腸が靴下を半分裏返しいたした樣に重り合ふ病氣でありまして、その重り合いましたところは血行が止り破れて終いまして一命に關することのあるものです。

この病氣は一年未滿の兒に尤も多く來ますもので、その原因として數えられてありますものもいろ〳〵ですが、腹部へ劇動を與へしがために起ることが往々にあります。これはこの生れて間のない兒は末だ腸が充分熟成して居りませず、腸に彈力が少いやらその外その周圍との關係なぞも大人とは大に異るところがありますためでして、劇動を與へたから必ず起ると云ふではありませぬが劇動が主なる原因をなして居ると考へらるゝ事が往々ありますのと、又此の病氣はその重り合いました場所が惡いと、直に險惡なる症狀を呈し、適當なる治療の時期を失しますと取返しの

附かぬことゝなりますため、特に玆に御注意申すのです。

一　急劇に高い〳〵をせぬがよし

可愛らしき嬰兒を抱き上げましたとき、ニコ〳〵と笑い、オゴ〳〵と片言なぞを申しますと、兒煩惱ならぬ人も思はず頰に接吻してやりたいほど可愛らしいものなので、何とかして嬰兒の喜ぶことをしてやりたくなります。

その時よく高い〳〵をしてやる人があります、嬰兒を手の平に乘せて、下より上へ投げ上げる樣に、上から下へ投げ附げる樣に、嬰兒が笑顏でも見せると愈々興に乘つて續けます。

嬰兒の自體は伸びたり縮んだり、腹部は大なる劇動を受けます。この時或る機會を得て腸が重なることがあるものです。されば決して急劇に高い〳〵をせず、同じく致してやるにしても靜かに、腹部へ劇動を與へぬ樣に注意せねばなりません。（宮

二　倒に墜落して腸重疊を起したる例

生後十二ヶ月の男の兒でした。種痘も無事に濟み、生れて以來これと云ふ病氣も致せしことなく、發育も極めて良く榮養も佳良な兒でした。晝のことです、母親が小便をさせんと椽先でこの兒を引抱えて前を開いてシー〳〵と云ふて居ましたところ、何うした譯やら母親の手が辷つてこの兒は倒に庭前へ投げ出されて終つたのです。母親は驚倒して椽より飛び下りて兒を抱き上げました、抱き上げられると共に落されたる痛さと驚きに兒は悲鳴を上げて泣き出しました。

母親は座敷へ上つて色々と宥め賺して、乳房を哺ませましたら漸く眠に就きました。眠りし兒の顔を眺めつゝ母親は非常なる不安に打たれたのでした。あの高き椽より落ちたとき打つたるこの頭が追て腦膜炎など云ふ恐るべき病症を誘ふて來る

のではあるまいかと、母親は直に氷嚢を造り此の兒の頭を一心に冷しました。

數時間睡眠を續けました兒は漸く醒むると同時に強く號泣いたしました。母親は扨ては漸く疼痛でも覺えて來りしなるべしと、一心に乳房を哺ませて泣き止めさせんと焦りますが泣き止みません。乳を少し飲んだかと思ふと吐き出して終います。何處が痛むか、顏色を變へ手を盡して眠らせんと、母親も一生懸命ですし、家内中大騒ぎしてますが、夜中も少しも眠らず泣き續けますので、誰一人眠ることさへ出來ません。

明朝醫師を訪問しましたら直に灌腸をしました。出た便の中に血が混して居ります、體溫も三九度以上ですし、手足は冷え、呼吸困難も伴ふて居ります、腹部に軟かき腫物樣のものを觸れ、それに觸れますと一段と泣き出します。

腸重疊症と診斷せられ直に外科の手術をせねば生命にも關すと申し渡され、腸を開いて大手術を施すことになりました。

腹を開きましたら診斷通り小腸が大腸へ接續いたします處で、大腸の方へ重なり込んで終つて居ました。要するに之れは椽先から庭へ墜落いたしましたときに、腹部が劇動を受けてかゝる結果を招いたのに相違ありません。（藤井醫學士報）

不注意が招く愛兒の死 終

大正五年八月五日印刷
大正五年八月八日發行

定價金壹圓廿錢

（愛兒の死）
奥付

不許複製

著者　河合三郎
發行者　東京市麹町區平河町五丁目卅六番地　河本龜之助
印刷者　東京市麹町區隼町二拾番地　河本俊三
印刷所　東京市麹町區麹町二丁目九番地　洛陽堂印刷所

發行所　電話番町四二五八番　振替東京二〇九一四　東京市麹町區平河町五丁目卅六番地　洛陽堂

洛陽堂發行圖書目錄

（家庭教育の部）

東京市麹町區平河町五丁目三十六番地
洛陽堂
電話番町四二五八番
振替東京二〇九一四番

高島平三郎著

教育に應用したる **兒童研究**

定價金貳圓八拾錢
送料金十六錢

高島平三郎著

家庭及び家庭教育

定價金九十五錢
送料金八錢

高島平三郎著

兒童と謳へる文學

定價金壹圓
送料金八錢

高島平三郎著

女の心 附錄 **嫁と姑**

定價金四十八錢
送料金四錢

元良、高島、永井、富士川合著

兒童學綱要

定價金壹圓八十錢
送料金拾二錢

岡村準一著

兒童保護の新研究

定價金貳圓二十錢
送料金十六錢

稲葉幹一著
教育期兒童之健康法
定價金壹圓三十錢
送料金八錢

ケーラス博士著
家庭に於ける兒童教育の
理論及實際
定價金七十錢
送料金八錢

田結宗誠著
小兒の育てかた
定價金五十錢
送料金四錢

ムーレー博士著　水野義三郎譯
一才より廿一才に至る
小供の生活
定價金五十錢
送料金四錢

高島平三郎編
精神修養
逸話の泉
定價金一圓
送料金八錢

永井潛著
生命論
定價金三圓三十錢
送料金十六錢

小酒井光次著
生命神秘論
定價金一圓六十錢
送料金十二錢

渡邊喜三著
遺傳の研究
定價金一圓五十錢
送料金十二錢

山本瀧之助著
一日一善
定價金四十五錢
送料金四錢

石川弘著
通俗孝子傳
定價金六十錢
送料金六錢

嘉悅孝子著
怒るな働け
定價金八十錢
送料金六錢

福鎌恒子著
奥様とお女中
定價金六十錢
送料金四錢

手塚光貴著

忠孝

定價金六十錢
送料金四錢

山本瀧之助著

青年修養 **着手の個處**

定價金九十五錢
送料金八錢

花田仲之助著

報德實踐修養講話

定價金五十錢
送料金八錢

58
129

終